

菊花餘芳

160  
169

160-169



\*1200800013741\*

# Kodak Gray Scale



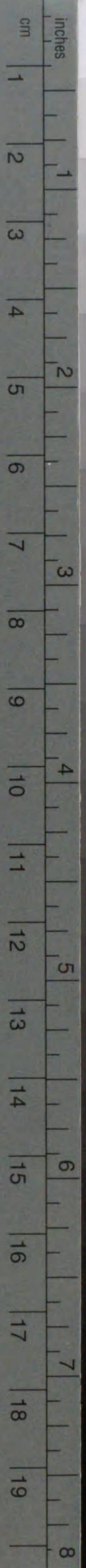
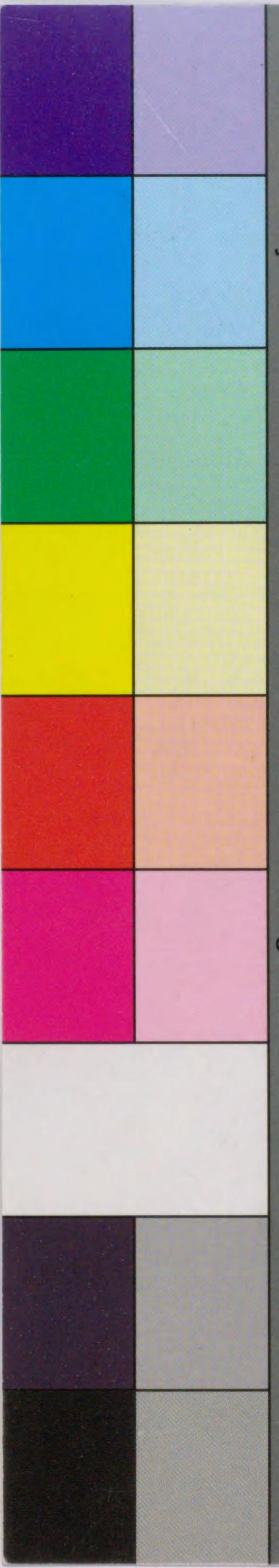
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



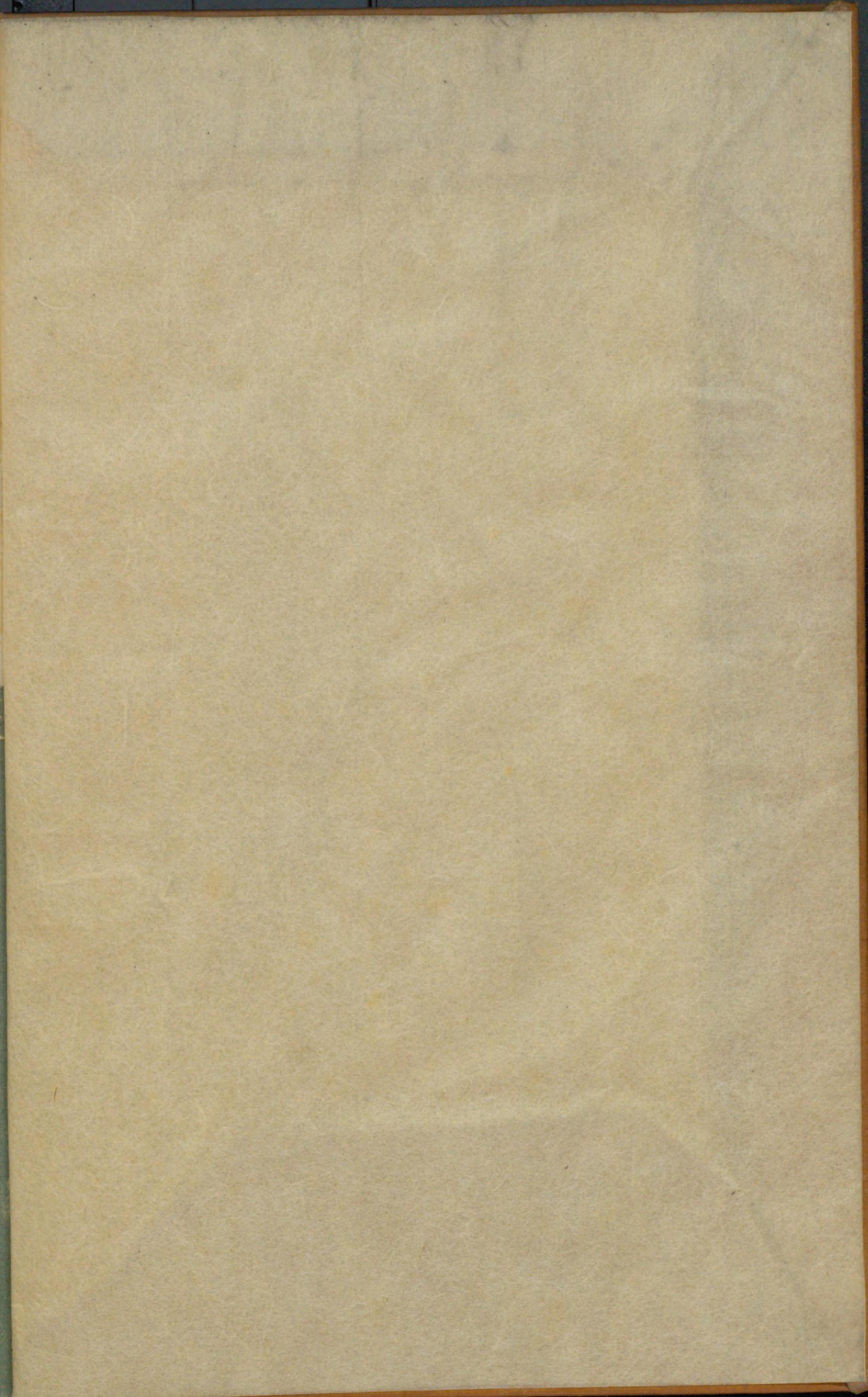
# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak





馬車心飯券





160-169

はしき

大正十一年十一月 東宮殿下統監武を我が讃陽に聞せらる高機の餘暇月の二十日を以て 鶴駕を我が坂出町に枉げさせられ特におのれの設立せる鎌田共濟會圖書館に 台臨あらせられたるの故を以て 玉裕に咫尺し 金聲を奉承するを得たるは無上の恩榮にして而かも本館特別の光輝たり  
恭しく惟れは今茲に新年 東宮殿下 勅題曉山雲の御詠に

あかつきた駒をこゝめてなかむれは

さぬきの富士に雲そかゝれる

と 宣はせられたり之を捧讀するもの誰か 殿下か我が讃岐の勝景に垂眷させ給ひたるに感動せざらんや抑も歌道は風教を裨補すること大なりおのれ是に於て今春を以て歌會を催し寄書祝と庭菊を題とし汎々作家の歌什を集め之を本館に藏し以て客秋の光榮を不朽ならしめんことを企てしに惠投の玉什選選頗る多し是れ誠に本館の光榮を増す所以にして而して又おのれの欣幸とす

大正  
12.12.24  
寄贈



はしかき

寄贈本

大正十一年十一月 東宮殿下統監武を我か讃陽に閱せらる萬機の餘暇月の二十日を以て 鶴駕を我か坂出町に枉けさせられ特におのれの設立せる鎌田共濟會圖書館に 台臨あらせられたるの故を以て 玉裕に咫尺し 金聲を奉承するを得たるは無上の恩榮にして而かも本館特別の光輝たり

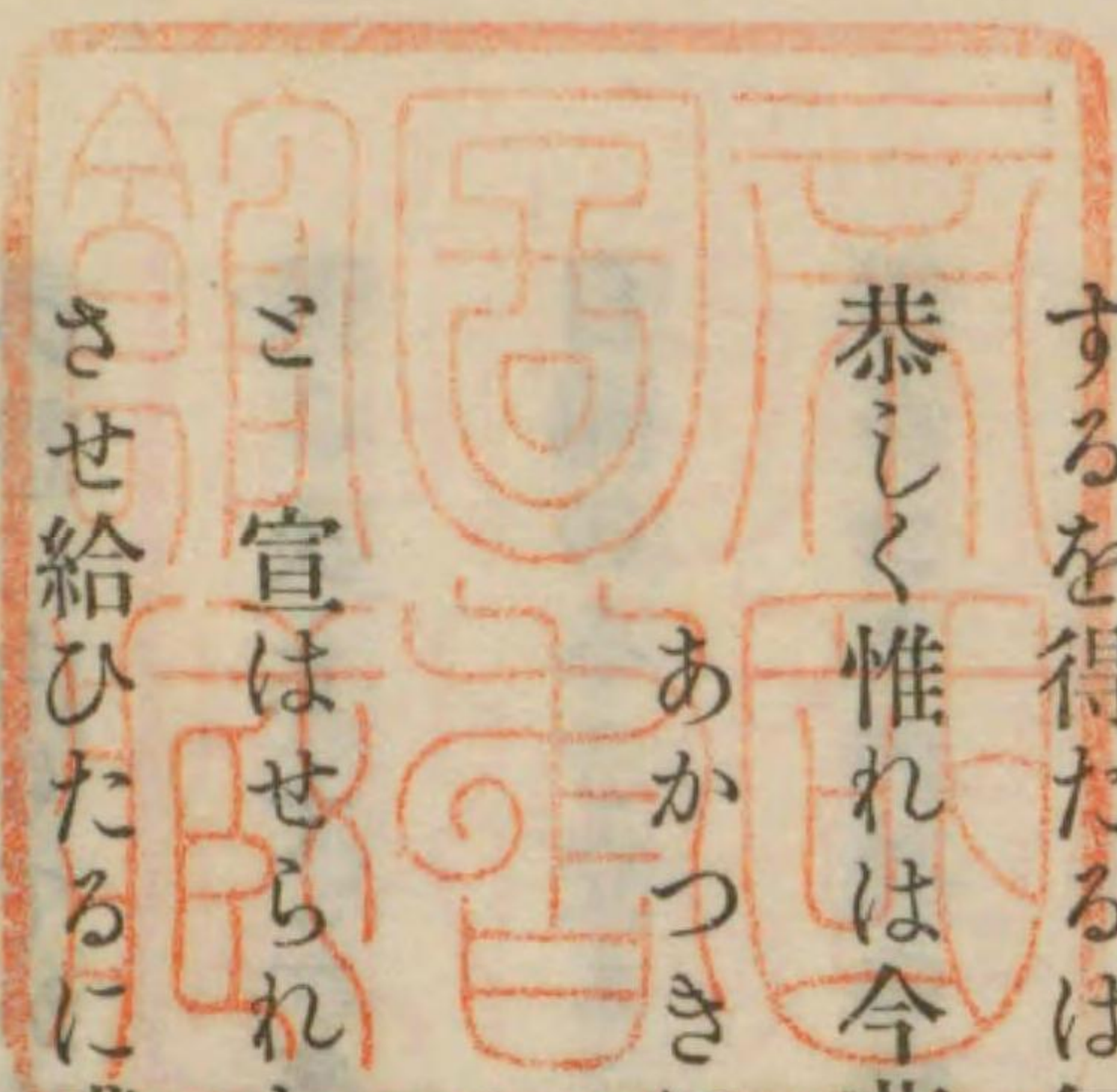
恭しく惟れは今茲に新年 東宮殿下 勅題曉山雲の御詠に

あかつきに駒をこゝめてなかむれば

さぬきの富士に雲そかゝれる

ご宣はせられたり之を捧讀するもの誰か 殿下か我か讃岐の勝景に垂眷せさせ給ひたるに感動せさらんや抑も歌道は風教を裨補するここ大なりおのれ

是に於て今春を以て歌會を催し寄書祝ご庭菊ごを題ごし汎く作家の歌什を集め之を本館に藏し以て客秋の光榮を不朽ならしめんご企てしに惠投の玉什選邇頗る多し是れ誠に本會の光榮を増す所以にして而して又おのれの欣幸とす





る所なり四月十五日取り重ねの儀を了したる後に輯めて冊こせるもの即ち此の書なり名けて菊花餘芳こせしは漢武秋風辭の蘭有秀兮菊有芳に因みて鶴駕台臨季節の記念こ集中の一題なる庭菊を擇ひて其の芬芳を千秋に傳へんこの意に由りてかくは名つけしなり

大正十二年五月

鎌田共濟會會頭

鎌田勝太郎

# 菊花餘芳

寄書祝

日のみこの御光うけて幾千代もふみの林の茂りゆくらむよの人の心の闇をてらさむこ集めし書のひかりかやく

うゑそむる文の林も日のみこの光をうけていや榮ゆらむ  
集めたる内外の書もいよなほ光そふらむ君のみませは  
日嗣のみこ立よらしつる此文庫つみおく書も光そふらし  
新らしくたつるやかたは置餘る卷の數より多き世そへむ

集めたる館の書をも照しけりあまつ日嗣のみこの御影は

日のみこの御光うけて幾千代もふみの林の茂りゆくらむ

よの人の心の闇をてらさむこ集めし書のひかりかやく

從二位子爵 牧野伸顯

正二位勳二等 二條基三弘

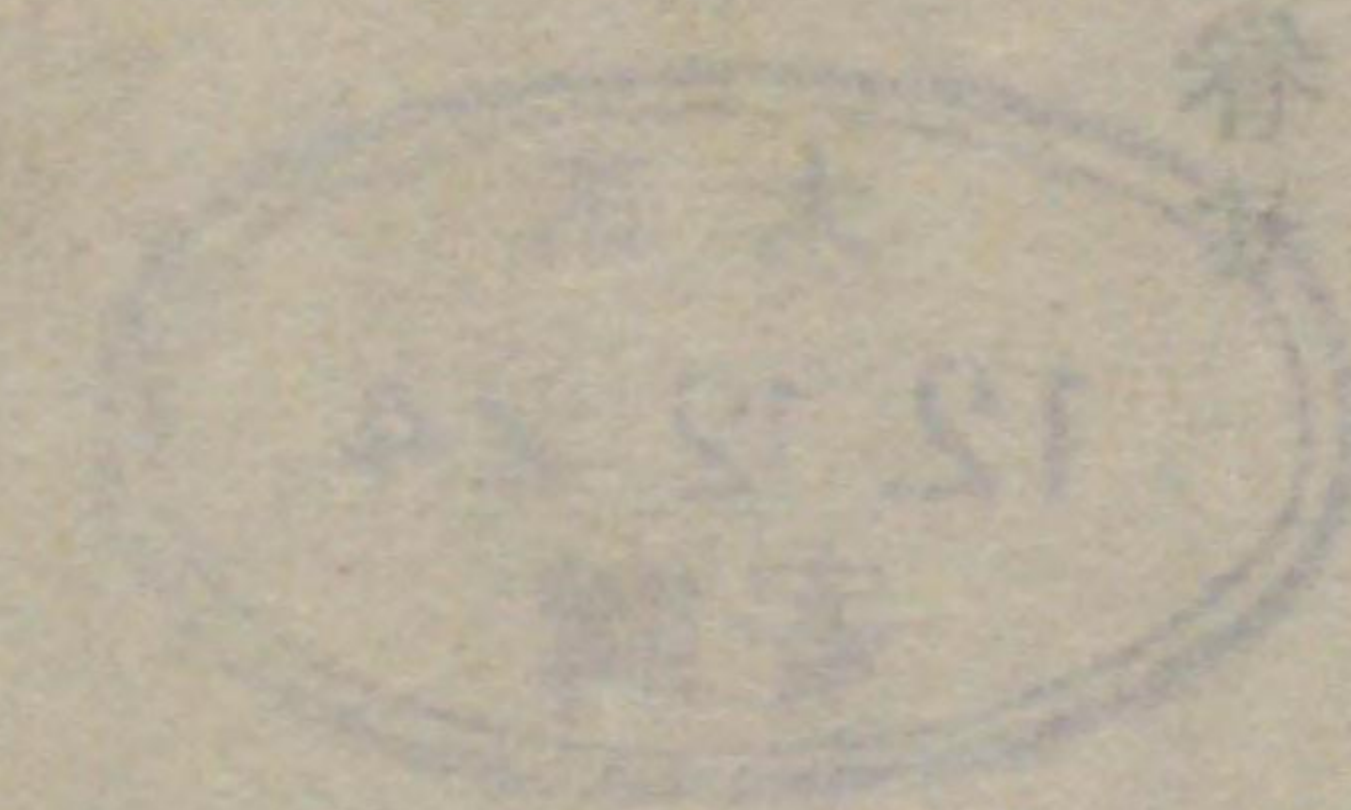
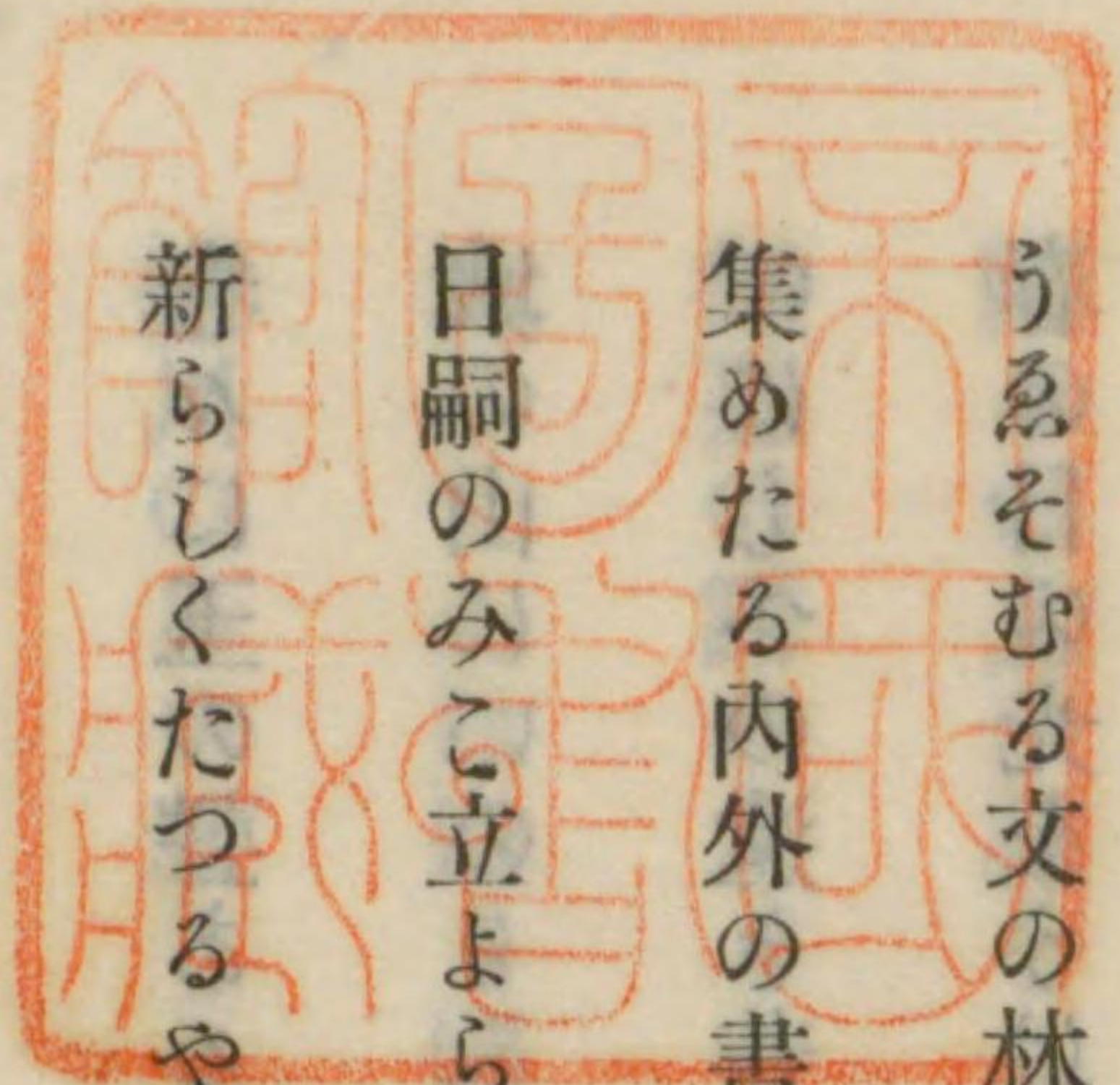
從二位勳一等子爵 松平乗承

正三位子爵 入江爲守

從三位伯爵 松平頼壽

同夫人 昭子

正四位勳二等 谷森眞典男





千代かけて彌榮ゆらむふみこの、文の卷々數そはりつ、

同 夫人

美與子

久かたの日嗣の宮のいてまじに光いやます君かふみこの

從三位子爵

細川 利文

大御代の惠のつゆにうるほひて書の林もしけりそひつ、

正五位勳二等

加藤 正義

卷々に玉の聲ある書しもそ世をてらすへきたから也ける

從四位子爵

松平 直幹

城の山にいのりし雨のか、りけん司かめてし文の花咲く

男爵

福原 俊丸

いにしへの遠き昔もちか、りき心のかよふふみの山みち

從四位勳四等

今井 彦三郎

春の日の光をうけて千代までも書の林はたちさかゆへし

勳四等

鍋島 榮子

かしこきや日の大み子の光さしふくらの光いよよか、よふ

佐々木 信綱

日のみこもみあしをこめてめてましぬ書集めたる君か績を

正五位勳四等

坂正 正臣

大御代の進みのまにま數ましぬふくらの書もそをよむ人も

正五位勳四等

杉 榮三郎

進みゆく御代の光も見ゆる哉やまこのからの文車の上に

正五位

松本 愛重

しけりそふ書の林の梢よりさかゆく御代の花はさくらし

正五位

佐藤 球

わけいらむ書の林の奥にこそひらけゆく世の道は有けれ

正六位勳六等

大河平 隆

國々の文の林をふみわけていよ、あふく君かみ代かな

正六位

芝 葛盛

御惠の露のか、りてここはに文の光のよをてらすらむ

正六位勳六等

東 胤徳

ふみらよむ道も開けて坂出の里のさかえの色そここなる

從六位

三矢 重松

綾川のあや珍しきいてましにふみのあやさへ輝きにけり

同

し 人

久方の天津日嗣のふみ卷はかきつき、て果なかるらむ

從六位勳六等

加茂 百樹

みそなはず御心深し今よりは書の數そふ御代にもある哉

勳六等

三輪田 眞佐子

千年迄書の上にも傳ふへし日嗣のみこのみあこしるして

正七位勳七等

鈴木 善建



天津日の春の光のてりわたるふみの林のさかえをそ思ふ

從七位 林 有隣

あや川の沙に千鳥の跡つけてかきたるふみは万代までも

正八位勳八等 岡田 有邦

大御代の光をうけてしけりそふふみの林を見るか嬉しさ

子爵母堂 松平 岳子

古への書の林をわけ見れば果なき御代のみちそしらるゝ

原 宏平 八十六翁

棟高く積重ねたる千萬のふみのはやしにはるのかせふく

本居 五齡

末かけて書見るたひに思ふかなありし昔の高き御稜威を

平田 盛胤

ふるき文新しきふみこりくゝに花咲匂ふ御代そめてたき

三輪田 元道

日の御子の御稜威にあひて書も猶いかにかひある心地しぬらむ

今泉 定介

いつ見ても新しき世を照したるふみは貴し天つ日に似て

與謝野 寛

御光もそひてみちたるふみくらはまここに國の寶也けり

田邊 きみ子 七十九姫

日にそひて學ひの道も開けつゝふみの林のしける御代哉

山岸 瘦石

世のなかの正しき道は茂りゆくふみの林の奥にこそあれ

矢島 鈞 七十四翁

いふへくは書を尊む思ひもて我大君をめてたしとす

與謝野 晶子

たふとしと世に仰かれむ春のみやのみ光そひし書の林は

武井 燿子

千萬の書てふ書をあつめつゝみるそめてたき御代の恵に

谷森 建大男

諸人のよろこひ集ふふみくらの國の寶とあふかさらめや

谷森 淳子

君かなも共に傳へむふみくらのふみの林は世々に榮ねて

谷森 登子

年々にさかえゆくかなうるはしき花もみもある文の林は

岡本 武智

開けゆくふみの林の奥にこそ人のふむべき道はありけれ

首藤 寛

千萬のふみに榮あり日の皇子をむかへまつりて白峰の麓

井上 雅二



ここに朽ちる事なし内外の文集めたる君かいさをは

星 久

古き書猶學ひてむ日に月にあらたなる世にあへる吾らも

白井峰子

春の日の光はこはに輝きて書のはやしのかをりつきせし

三宅龍子

日の御子の去年出まし、書殿に今妃の宮のみそなはず也

丹波貞子

この館の書みる毎に思ふ哉かしこき君のみ手のふれしを

青木菊枝

久方の月の桂も奥深きふみのはやしに折るへかりけり

渡邊 刀根次郎

君か代のめくみの露にうるほひて茂りゆくらむ文の林も

森田助作

はる宮もわたり給ひて香川なるふみの林の花も咲くらむ

片岡 哲

かき流す筆の命毛千代かけてつきせねものは水莖のあこ

加納彦松

日の御子のみかけもさしぬ國の爲よの爲ひらく文の林は

弘田 由巳子

圖書樓に春の日永し書に歌によき時をもつさいはひの人

白岩 つや子

新しき道を尋ねて古き世のふみのはやしにいるそ樂しき

半井 榮

天地のありのままなる大道もふみの林のおくにありけり

玄真

あま雲もいゆきは、かる不二ごいへご書の績の麗なり亮

澤 式

春のみやむかへまつりてよむ書の窓の光のいよ、高しも

印理東 昌綱

春の日の光まちねて千年までくちぬほまれを残す書くら

能勢 眞子

書こそは世の寶なれをさまれる今も昔のかへり見られて

小林 欣子

春の日の光をうけて榮ゆくふみの林はこはにかれせし

長 ゆき子

春の日の御光そへていやましに榮ゆつきせすのこる文庫

松尾 睦子

まよひきの横に書行く書にさへ直なる道は開けゆく世か

岡田 玉翠



鳥々の蟹か子迄も書をよむめてたき御代ごなりにける哉

福井安佳

これなくは花も紅葉も何にせむ書こそ御代の命なりけれ

福井朝甫

玉藻よし讃岐の國の輝きごみこのみゆきは書きて留めむ

林遊入

かくはしの常世の字もて書すへき日の大み子のみゆき也亮

同林し人

春の日の光をさのて平平とよむ書はあやふき京都府

木野戸勝隆

鳥蟹の跡布み見てもまよはすてすなみゆくなり敷島の道

正五位勳五等  
木野戸勝隆

四方の海隔てぬ御世は國々の書見るここも安けかりけり

正六位  
長屋基彦

かきのこす聖の文のたふごさは國のたからの鏡ごや見ん

從六位勳四等  
佐藤信有

よに出る書の數よりよむ人の年にます社めてたかりけれ

從七位勳八等  
玉木捨吉

大御代のふみの林はごつくにのこごはの花さき匂ひつゝ

從七位  
鈴木鹿直益

書籍のする五つの車いつまでもみゆきの跡を引止むらん

堀永休

何事もふみのひらけし力にてよの榮をはみるそたのしき

吉田慎平

大君の御代の榮もいちしるく内外のふみの數かきりなし

杉本米軒

千代をへてなほ行末の事までもかき集めおく書のひご筆

下橋敬長  
七十九翁

ゆくすゑのさち祝ひつゝ讀む書は學の道の友ごこそなれ

三輪長太郎

水莖の跡いろ／＼に集りて盡せぬよゝにのこすなりけり

岡田梅仙

神代より代々に傳はる千萬の書にもしるき國のたふごさ

小島小兵衛

昔より今に傳へてふみの道のいやさかゆく君か御代哉

岡本爲治

世間の事を居なからしる人はふみみる數もさそ積るらむ

高木善立

かしこきや神代の神の言の葉を千代万代の書にしりけん

前川後河



すめみこのみそなはしつる坂出の書の林はいや榮ゆく  
不破 巖

國民のためにたてるふみやにそ千代の光の輝きにける  
浅野 里子

石上ふるここふみも藏れるこのふみやこそちよに榮ぬめ  
竹内 幾子

御惠の露のあまねくかかる代はふみの林も彌しけりつゝ  
花 輪 よしの

飯の山いひつきゆかむ長へにこのかしこさを書に傳へて  
柏村 端子

鳥のあこふみのはやしもあきらけし春のみ山の花の光に  
福田 絹子

花さける文の林もごしここに色まさり行くきみかみ代哉  
正六位勳四等功三級  
有馬 太郎

わたのこの人も傳へて仰くらむ秋つ鳥根の千代の古ふみ  
早川 清吉

限りなきみくにの事をこま／＼に千代に傳ふる文を尊き  
同 人

日に月に學ひの道は開けゆきてふみの林はいや榮ゆらむ  
島山 重孝

幾千巻いく万まきつみそへてふみの林はしけりゆくらむ  
小野 利教

千万の寶何せん一まきの千代につたへむふみにくらへて  
中西 靈洲

かき残す言の葉草のえならぬは千代もふみみる葉也けり  
同 人

朝夕に文の卷々くりかへしひしりのをしへあふく樂しき  
辻 清職

惠まれしうたの林のふみよめはみやひ心の匂ふうれしき  
谷 知六三郎

その昔こまの國より傳へ來し書は吾らのたからなりけり  
同 人

一卷の書もたふごし大きなる力をあたへあつくなくさむ  
谷 野 禎藏

駒留て讚岐のふしをめてまし、御歌は千代の文に薫らん  
海野 恭基

幾度かくりかへしても新しくみゆるは古き文にそ有ける  
豊田嶋 孝造  
七十八翁



世の中に目出度書は多かれこめてたきふみは紀記と萬葉

宇田川 文海

召す駒の蹄こゝめて日の御子はいこ畏くも文のやかたに

井上 寛次郎  
七十四翁

からやまと言葉の花をここしへに残す史こそ寶なりけれ

戸田 養

朝夕にしたしむ史の言の葉は己か身も匂ふ心地こそすれ

同 人

一卷にちゝをこめたる言の葉も御座せし跡に各社残れ

宇野 宗観

世の人を教へ導く文の道すゝむ御代にもおくれさりけり

石渡 ます子

古へのひしりの君ののたまひし言の葉草も千代に榮ゆむ

岩崎 花子

四方の海かたみに書の花つみて睦ひあふ世そ樂しかりける

深井 つね

永へにこのよろこひを忘れし書のかすくつる君哉

和田 のふ子

日のみ子の光仰きて數々のふみもはえをは語りあふらむ

久保井 敬子

居なからにごつ國の様しらるゝはたふこき書の力なり亮

柴谷 鶴子

忙しき務のひまに外國のふみを手にする御代にもある哉

同 みつ子

はる宮のみそなはしつる書こそは後のよ迄の寶なりけれ

神山 さや子

神奈川縣

文車の書に傳へて残るらむかしこきみこのこめし御跡は

從六位  
山川 鶴市

二書の残す光にこほつ代の神のみあこはまさふさにして

同 人

記しおく書みほくらん神代よりゆらす榮ゆくみよを偲ひつ

從八位  
高橋 雅晴

樛の木のいやつきくくに榮えなむ文の林の道しるへして

末松 正

わけ登る書の林の奥深くつきぬや御代のためしなるらむ

藤原 よの子

兵庫縣



すり卷の棟木支ふる數見ても盈ち足れる宿の榮をそ知る

正五位勳五等 椿 時中

日の御子を迎へましつる畏さをかきのこしても祝ふ此文

正六位 藤 卷 正之

鳥の跡こめて辿らはいそのかみちよの古道ふみも惑はし

從六位勳六等 加藤 正 誼

昔今かきりしえぬかすの書るなからに見るみよの幸哉

從六位 矢野 豁

我國は言葉の外にもろこしの文字の惠のおほいなるかも

勳八等 杉 山 健吉

山賤か庵にも海人か苫屋にもふみよむ聲の絶えぬ御代哉

戸田 稔

雪ほたる今は頼ます書よむもすゝみゆく代の光なりけり

稻田 茂樹

傳へこし古こ文にありし世を手にこる計り見るそ貴き

野尻 重次郎

横はしる蟹なす文も葦原の國のたすけこなれる御代かな

同 人

ありし世も今は親しくなりに免書きけむ人の文字の光に

前田 襄

千万の數を重ぬる言の葉に書のはやしはいよゝさかえん

岡本 祐喜

皇國の内外の書の數々をひつきのみ子のめてましてけん

山邊 定子

御光を仰きし宿のよろこひはこの一卷にかきあまりけり

長崎縣 土肥 通邦

年のはに榮えゆく世はいや日計に書の本も茂り來につつ

新潟縣 澁谷 豊治

棟にみつ文くらの書の幾千卷かすごりによむ齡經なゝむ

小宮 陸

榮に行君かそのふに生ひたちて彌しけるらむふみの林は

橋本 時治

おひしけるふみの林の下蔭に進みゆく世の道も見ゆけり

式場 益平

埼玉縣



しつの子も文の林に入立ちて桂を手折る御代にもある哉

從五位勳六等  
金 鑽 宮 守

朝な夕な繙くふみに君か代のふかきめくみをまた仰く哉

正八位勳六等  
井 岡 良 明

世の爲に集むる書の數に君かいたさをも積り行くらむ

正八位  
桑 田 良 隆

やまごふみからよこふみも悉く榮ゆく御代の寶なりけり

正八位  
磯 部 重 浪  
勳八等 八十五翁

秘めおきし文庫開きて世の人を導くいさを仰かるゝかな

勳八等  
砂 長 彦 四 郎

いにしへの聖の書の一巻は世にたつ人のしるへなりけり

中 村 了 達

ふつくるに向ふ折々ひもこくは臣かまもりの書のひこ巻

同 人

勤みて筆さる子らの文字の上にみえわたる哉みよの光は

藤 尾 仙 太 郎  
七十八翁

ここ靈の國の誇り子らか書くいろはにみ代の光みえけり

同 人

進みゆくみ代にならひて蟹文字のあゆみも速き葦原の國

同 人

水莖の跡をも見れはいさをしの高き心もしられけるかな

原 恭 平

みそなへし文の林に花咲きて八千代に高き香の残るらん

荒 木 喬

勤みてかき習ひつゝ日をふれは文字の上にも力見えけり

塚 田 覺 太 郎

大君の御代安らげく永へてふみよむ人のおほくなり行く

堺 本 立 榮

書の道に池のほごりの蛙見てこころこめたる人もあり亮

橋 爪 力 太 郎

思ふ事はかきにかきて物たれる書こそみ代の惠なりけれ

藤 尾 梅 興

神として祀られし人のかきすてし書こそ御代の寶也けれ

中 澤 厚 村

千世へての後の世迄も消ぬせぬはしるしゝ書の力なり亮

岡 田 順 達

うるこみしふみよむ庭の男松ひこゝせここに枝の榮ゆる

岸 鐵 三 郎

いさをしの高き心も知らるかな清きなかれの水莖のあこ

郷 原 ちる子



學ふにもかくにも書はうら安くいろはは國のほひ也。亮

藤尾

よし子  
六十八姫

繁りゆく文のはやしに大御代の惠あまねき程をしらるゝ

井岡節子

古への筆の力のあらはれて今もかはらてのこるすみいろ

藤尾秀子

きみか代の惠と共に光るらん書きにしふみの墨の色つや

藤尾サク子

勉むれは勉むる程にかく文の筆のはたらきみゆるみ代哉

藤尾満子

群馬縣

大野泉

日々になり月に數そふ書の巻いく千萬のひこやひもごく

大野泉  
七十一翁

日の御子を迎へしほまれ文により萬世までも残す君か家

金井源一郎

かきしるす言葉の花も匂ふらむいやしけりゆく文の林に

細野仲次郎

よりて來るふみの數々山なして机の上にみるそめてたき

旭亮道

古へのふみの光をけふ祝ふ鎌田のいへはほまれなりけり

同し人

今も猶世々に残りて絶せぬはふるこごふみの水莖のあこ

宇多琢磨

大御代の榮とともに進みゆくふみのはやしの奥を極めて

印東太福

上毛の入野の里の石ふみは苔むせるこもくちせさりけり

松本萬藏

書よせて祝ふ鎌田の園生には床しむつみの聲そききける

境野彌三郎

千葉縣

鈴木保司

皇御子の御惠うけて開けゆくふみの林ははてなかりけり

鈴木保司

人の爲世の爲きみかあつめてしふみこそ道の寶なりけれ

高木京次郎

いやましに榮ゆく世を祝ふ哉書をよせつる君を仰きて

鈴木裕二

日に月に書の林のかけ高くしけりあふこそ嬉しかりけれ

寺本縫右衛門



風かをるやかたの窓に讀む書は園の譽を千代につたへん

石毛 正作

日に月に鉛の文字の増す御代にほひ高きは櫻木のふみ

菅谷 寛

富士の名を君かいたの數々は讚岐あかたのふみに輝く

矢部 桂三

つきくりに道を傳へて世を照らす書の光を貴かりける

上代千代五郎

日の御子の惠をうけてさき出し花そめてたき書の八千草

林 東次郎

日に月に開けゆく世もくさくさに書の惠によれるなり鳧

飯田 信三郎

國つ書外國ふみもさはなれは學ふにやすしこの大御代は

高木 守中

雲井よりたつもおりにきて遊ふなり書の林はこはに榮ゆむ

飯田 太平

譽あるあるしこ共にさかもこの書よむ庭は榮ゆくらむ

向後 勝一

ひもこけは遠き神代のもののふの功も見せるふみそ尊き

高橋 高風

千早振神代よりしも傳はれる書こそ宿のたからなりけれ

本城 巳之助

いにしへの雪にもしるくみゆる哉動きなきよの國の光は

野口 哲子

奥山にわけいる人の手引してみ世をたすくるふみの道哉

栗山 親之

皇御子の惠の風に坂出のふみのはやしもいやさかゆらん

市村 ふき子

茂りゆく書の林の松か枝に君千代ませこあしたつのなく

同 人

種々のふみの林にわけいれは花さりくりにかくはしき哉

同 人

世の人のわけいるまゝに任せたる書の林を繁りゆくらむ

戸田 忠友

石土ふるここふみそ皇國のいや開けゆくもこゑなりける

柳田 與一郎

柳田 與一郎

柳田 與一郎

石土ふるここふみそ皇國のいや開けゆくもこゑなりける

柳田 與一郎

從二位勳四等子爵

從五位勳五等



かき残す筆のあこよりさく花の匂は千代も變らさりけり

豊田 喜代治

千早振神代のふみをしをりにてすすみゆくなり大八嶋國

萩原 藤作

日の御子の光仰きて千萬のふみもはねあるこのやかた哉

荒川 辰之進

日の本の書緋けは西の洋の言葉そのままかきのする世や

土屋 福藏

天地の開けし頃のふみ見てもかきりなからむ大君の御代

渡邊 長吉

長へに傳はるふみは後の世の玉こやいはん寶こやいはむ

間瀬 定重

幾千代も傳へまさなむ日の皇子のみゆきの跡に文字を記して

直井 喜一郎

分入れはわけ入るままに廣くして文の林の奥もしられす

島田 加茂

高光るひの大御子のみいつにそ文のやかたも彌榮ゆなる

樋口 忠延

開けゆく御代のしるしと嬉しきは書庫に入れるこたくの人

伊藤 盛次

いてまじし御跡の光さしそひてよよを照さむ書やかた哉

倉田 金十郎

永久に書きのこされしこれの榮かさりて嬉し君の家かな

鈴木 宇兵衛

大御系千代萬代に變らぬは日本みふみそあかしなりける

野田 菅大磨

さこ人もふみの林にわけ入りてみ代の惠の花や閑散さむ

岡田 辰次郎

淀なく流れて清き水莖のあここそ千代のひかりなりけれ

中野 周次郎

朗らかに神代の卷をよみゆけは千代をこなふる園の松風

尾崎 忠功

いそのかみ古き昔をまのあたり今のうつゝに水くきの跡

松浦 廉之助

静岡縣

正七位

正七位

正七位



よみふりし書の中にも又よめは又新しくささるものあり  
いにしへの人の残し、水莖に神代の事そくみしられける  
みそなはず菊の薫りを水莖にうつして祝ふ言の葉もかな

山梨縣

千萬の書の卷々もろ人のよみあきらむるみ代そさかゆく  
畏くもみそなはされしふみこの書は千歳に光をそへつ

一卷の筆のすさひの言の葉もいく千代かけて寶こそなる

日の皇子の御代に比へて山こつむ書の卷々數そしられぬ

散こころしらて榮えむ咲ささくふみの林は風もたすて

年々に開けてみゆる世なり覺そこしられぬならの下道

從七位勳七等  
中 込 劍 治

從八位  
内 山 善 市

石 津 一 郎

從七位勳七等  
羽 田 一 夫 成

勳八等  
内 田 浦 次 郎

勳八等  
橘 田 徹 乎

勳八等  
輿 水 中 只 徹

宮 川 正 十 彦  
七十七翁

櫻 井 義 令  
七十五翁

我が國の君と民との中らひは異國の書にためしあらず

大御代と共に榮はんみ惠のつゆもかかれる書のはやしは

言の葉の花を集めし此ふみは萬世までもかにほふらむ

まつしこも人の情の書によりて學ひぬ易くなれるみ代哉

古きふみよみてこそしれ新しく進みゆく世の今日の榮を

牛に汗し棟にみつる千万のふみより御代は開けゆくらむ

繰返すた、一卷の書にして千代のむかしを見るそ嬉しき

移りゆく世にはあれとも我國の書の誠は變らさりけり

千代よほふたつもあそへりいさをしも譽も高き文の林は

わけ入らむ人の榮と君かうゑしふみの林は千代に榮ねむ

渡 邊 春 英

宮 川 牛 巖

竹 川 文 平

同 人

中 川 玄 隆

河 野 輝 身 松

久 保 國 光

赤 尾 小 三 郎

守 家 啓 作

赤 尾 金 太 郎



こころしへに書に記して祝ふへき日嗣のみ子の御跡傳へよ

網野幸枝

古への様を傳へて水莖のあこかくはしき千代のここの葉

橘田邦子

日に月に新なる世の花さ咲くふみの林のかけそあまねき

名取正代子

榮えゆく御代の惠の露おひてふみの林のいやしけるなり

武田つる子

辿りてもなほ奥深く繁りあふふみの林はいやさかえつゝ

宮川芳子

限なき世のあこさきもまのあたりみる如しるす書を貴き

内田濱子

滋賀縣

人

古の書にためしもあらぬまたたかきほまれこの館かな

今村俊亮

綾川の千鳥のあこにこゝめなむ飯の山より高きほまれを

同し人

國たみの進みゆくてに見ゆるかなふみの林のしけき山々

藤原喬樹

いと易く多くの書を読み得るも開けゆく世の惠なりけり

大島一雄

後の世も人やうくらむ集めたる國のうちこのふみの惠は

渡邊市造

世の人の道きはめむと奥深くふみの林に入るそゆかしき

野口宗治郎

岐阜縣

栗田

たちならず人こそたえね年のはに繁り榮ゆるふみの林を

古根七十九翁

神代よりかきのこしあるをしへ草ふみの林そ今に榮ゆる

野々村久次郎七十八翁

筆のほに墨ふくませてかく文のうへには老もみぬ君哉

鈴木正俊

縦横によむふみの道よくしりてひろく世わたる君を貴き

坂倉信廣

山ならず海にもあらず身の幸は文の林のおくにこそあれ

淺野敬芳

千代ふこもかれすや有覽君か手にかき流したる水莖の跡

渡邊俊明



わけいりて書の林に遊ぶ人多くなりゆくきみかみよかな 横井磯一

古きよをたつねて今の事しるはあまたの書の力なりけり 中島弘海

千萬の書を集めてよの人にみする窓よりひらけゆくらむ 同 食し 代 人

此家にかさなる書を畏くも日嗣のみ子のみそなはしけり 松井太郎

ふるき文あたらしき書數々に人のこころの尊くもある哉 山田三秋

見たまひしみあごその儘書列ね幾久しくも祝ひまつらむ 平野丑之丞

治れる御代の事蹟つはらかにかきあつめても祝ひける哉 平野宗甫

書の數いよよまさるは月に日に榮ゆく御代のしるし也 林 可 春

あたらしき事のみ好む世なれとも書は古きを尊かりける 同 人

みてにふれし書畏しと思ふ覽日嗣の皇子の大いてましに 脇田有年

長へに書しまつりて祝はなむ坂出の町にいてまし 日 を 平野好子

長野縣

あし曳の山の奥まで開けつゝふみ見る人の多くなりゆく 今井萬之丞

あや川をあやなす春の川千鳥ふみをここほく君か庵かな 宮坂朝次郎

かきりなき生命を得たる心地して聖の文を讀める嬉しさ 伊東連城

麗はしきその人からを自から書にあらはす君そしたはし 矢島作太郎

搖きなき世の礎を仰かれてみるもめてたき筆のあごかな 金子昌太

新玉の年の祝ひに大御歌うつしのふみをかけてあふけり 今井今朝治

煙立ち雲よひおこす墨の香にかをれる君そ慕はれにける 野口虎吉

嚴めしき忠の一字に皇國のもごあめてたくいや榮えけり 金子喜一



嬉しくもひしりの書に残りけり世をわたるへき道の教は

陶山 傳兵衛

山賤も海の少女も押なへて書をし讀むは御代なれはこそ

宮城縣

正六位勳六等

山下 三 次

年々に書のはやしのひろこりて分入る人のしけき御代哉

小倉 茗園 七十六翁

かきなかすなかきためしは綾川の千鳥の跡も幾世傳へん

福島縣

勳七等

安齊 齋樹

螢にも雪にもなれてよむ書の卷も盡せぬ御代そたのしき

勳八等

笠原 中正

御言のり下し、文のはやしこそ賑はふ君か御代の花なれ

佐久間與右衛門 八十五翁

うなるらか心の玉の墨の跡残すも御代のひかりなりけり

同 人

こりわきて貴かりけり阪出のふみの館のあはれみふみは

菊地 九一郎

千萬もふみのはやしにみゆる哉つるの姿も龜のよはひも

安齋 光俊

文机につみし言葉の書見れば君か代奈かくうへを社思へ

佐久間 富治

開けゆく御代の惠の露をうけて文のはやしは彌榮はつゝ

森 清

しけり行く文の林にしられけり君かみゆきのかゝる家門

國分 三作

大君の御言たまひしこふみは幾代つきせぬ國の石すゑ

矢内 龜太郎

集置く千卷の書をこゝに來てひもこく人や樂しかるらむ

渡邊 吉太郎

進み行く代にこもなひて年々に茂るはふみの林なりけり

菅野 八郎

ごりかはす書の林に言の葉の花も實もある御代そ嬉しき

吉田 春治

君か代や内外の宮もいさきよくまもるは文の力なりけり

佐久間 與

新しき文のはやしにいそのかみ古き道ふむ御代そ樂しき

林 平藏



棄してわけいる玉のはやしにはあせぬ言葉に花を匂へる

渡邊久壽

昏々介の内代の宮よりちちもくまよる文の代青森縣

對入間 典

日の御子のわけいりまし、坂出の書の林は千代も榮えむ

佐野正己

ちはやふる神代の事も傳へきて書はみくにの寶なりけり

米谷宗英

ちよろつも榮えますらん皇御子の行啓まし、ふみの林は

村田妙誠

大谷の贈言たまひとてふ心の秋田縣

大内 大領

わけくれば書の林のはな紅葉ひと待つはかり咲匂ふなり

正七位 龜井寛造

千萬の人のこゝろをてらすらむ打集へたる書のまきまき

藤庭祐貫

をさまれる御代にあふこそ嬉しけれ朝夕書に親まれつゝ

山田魁太郎

み惠の露にうるひて年々にふみのはやしは生ひ茂りゆく

櫻庭庄藏

真心の外はかなはず世につくす文の林にみゆきますこは

青木良藏

千萬の人のこゝろをてらすへき書こそみよの光なりけれ

荒谷れつ

白神の長の賦のむらのてふ心のおかしの鳥取縣

水原春一

東宮の光をうけしふみのやのふみも花さき世にかをる也

從六位 中村元彦

譽れをは津々浦までも知られける兢ひてよする祝ひ玉章

緒方甲子

古言の書のこゝろの深ければよみかへしても盡せさり鳧

富山縣

千早振神代の昔しるしたる書見てそしる御世のさかえを

細川秋岳

新なる世の道ふむも古への書のをしへにしたかへはなり

中川性英

新なる世の道ふむも古への書のをしへにしたかへはなり

板倉吉三郎

鳥取縣

式部



御車のひきし光はかしこくもこはに残りてにほふ石ふみ

石上古こふみに日の皇子のみいつをそへて館も榮ゆく

國の爲君のためにこかきつくる書こそ世々の寶なりけれ

開けゆく世のさまくの知るなり御惠ふかき書の功に

うは玉の闇夜もしらて渡るらむ文のをしへの光り仰きて

紙の面にしるく残して萬代もにほひは盡きぬ水莖の跡

まかやく國の寶こ大和書今もむかしもころして見む

白峰に昇る旭のかけさしてふみのはやしはいよ榮む

東宮の行啓仰きてかしこくも坂出のふみのはやし榮む

しきしまの道たに知らぬ身の上に文のよここの光さす哉

きはみなきみよの光を書に見て祝ひ行かなむ敷島のみち

いにしへの書見るたひにおもふ哉み惠ふかき御代の教を

島根縣

古へのふみ見るたひに祝はなむひらけゆく世の光仰きて

岡山縣

さぬきかたほまれも高く此文屋光りをそふる御子の御車

底ひなき學の海の藻鹽草おひしけりゆく御代そめてたき

みてつから書残されししるしこそよ傳ふへき寶也けれ

千代かけてふみの林に匂ふらむ行啓かしこき鎌田圖書館

駒こめてみそなはしける讚岐富士書の上にも残しましたり

從七位勳七等

佐伯友光

七十七翁

同

早川鱒太

稻田久治

遠藤重福

大森

莊之助

細谷

田力

永塚春一

妹尾游理

中西勝補

今岡常野

岩田美津子

足立於こ

岡山縣

正七位勳七等

安原地平

從七位

問田正夫

正八位勳八等

前田源四郎

從八位勳八等

數見保業

同

從七位勳七等

同



磨かなん我玉の緒も内外の書あれはこそよるへありけれ

丸山久右衛門

日の御子の臨ませたまふ圖書の館幾千代迄も榮えける哉

中原道義

万卷の書をはあつめて諸人のまなひの道を開きけるかな

同 田し 藤四人

見るからに己が心は澄みにけりこはに嬉しき水くきの跡

阿部 五章

名に高き讃岐の富士のそれよりも聳えてみゆる書の林の

大原 専次郎

日の御子のみそなはしけむ今年より書の林も光そへたり

岡 直盧

言の葉のふみの林の奥迄もいるにやすけき道はひらけり

川澄 雅山

貴きも亦賤しきも集ひきてともに書見るめてたきこの館

赤木 一二

君かよの長きためしはよむ書のつきぬか如く萬代までに

山下 松次郎

人皆の見まくほりするふみ數多つみて重ねん館はこの館

溝手 重兵衛

この園の文のはやしも天津日の光をうけて立さかえけり

桑野 静惠

日のみこのみかけをうけて茂りゆく書の林は幾代榮えむ

秋久 千代子

ふみまよふ人こそなけれ道すくき文の林の開けゆく代は

吉崎 祚子

この館の書の林は千代かけて春のひかりやみち渡るらむ

藤原 淑子

この館に千代の榮の見ゆる哉文のはやしの茂りゆくよは

正木 せい子

茂りゆく書の林に天つ日のかけさしそひていよ、榮む

江見 定子

かしこしや書よむたちに仰く哉御子の尊のけふの美行を

久保 晴枝

山口縣

中村 珍政

書みれば神の定めし道見ぬて國の手振のいよ、たふさき

兼 富忠

大御代の惠の露にうるほひてここの葉草のふみに匂へる

兼 富忠

從五位勳六等

中村 珍政

兼 富忠



ありとある遠き境も文通ふ道ある世こそめてたかりけれ

坂本梅溪

和歌山縣

紐さけは玉もこほる、心地して比利飛あつめし昔思ほゆ

從五位 奧 五十鈴

菊の花咲きて薫はみちにけりかすさへ知れぬふみの林に

鈴木 融

卷の數かそへ盡さす榮はませふましし御跡書にこそめて

栗林 幸子

香川縣

あたゝかき朝日のかけに照されて書の林の花も咲きけり

從六位 堀澤 周安

をしねかる鎌田の里の子等も來て書に親しむ君か御代哉

從六位勳六等 石井 朝太郎

文くらの書の卷々輝きてくにのみいつにひかりそふなり

正七位 青井 常太郎

進まれし世には何處にいたれるも文の林の開けぬはなし

從七位勳六等 水原 義正

學ふへき文の林に咲く花は開けゆく世にいやさかぬつゝ

從七位勳六等 山田 澄次

鎌さりて稻かる田子もふみよみて心養ふ御代そめてたき

從七位勳八等 請川 新次郎

内に外に有し事とも記置きてちよに残すは書にそ有ける

正八位勳八等 小河 甚十郎

つらねたる文の林にわけ入ればいよゝ學の道にすゝまむ

正八位 宮武 秀三郎

諸人に學の道をすゝめんこふみよむ室をたてしきみはも

從八位勳七等 力丸 安頼

繙けは野へも山邊も月雪もなへてふみには見ぬにける哉

同 人

天照すひのみ恵に茂りゆくふみの林は見れこあかぬかも

奈良 角三郎

ふみくらに埋れし書も大御代の光をそへて世にいてに亮

友安 胖太郎

書に乗せてひくや車のいつはあれと進行く代は見ぬ人もなし

宮野 爲久

君か代は内外の書をこりくゝに取見る人の數そしられぬ

齋藤 柳泉 八十翁



さかいての雲を分來てひなつるの圖書の館の松に宿れる

同 人

君か代は吹く春風ものごかにてふみの林のはなそ咲添ふ

村尾 喜一郎 七十九翁

黄金にも玉にもまして世の人の寶と仰くふみそたふごき

堀家 嘉大造 七十二翁

堆きうちごのふみは世の人のこゝろをみかく寶なるらん

越智 儀三造

さし昇る御代のひかりと仰く哉集めしふみの千卷五百卷

土屋 徳太

繁り行文のはやし道しるへたてし勳の高くもあるかな

赤澤 末吉

古事をつたへつたへて後の世をひらくは文の力なりけり

瀧本 重秀

ひのみこののそませ給ふふみ館庭の草木も匂ひ増しけり

鳥取 次郎八

うもれるし書も數々あらはれて御代の光のあふかるゝ哉

片岡 恕平

幾千代に日嗣の皇子のなりましゝほまれ傳へむ書の數々

乾 金次郎 七十九翁

文をよむ聲に絶間のなきまゝに開け行く世を愛たかりける

小西 栖浄 七十九翁

御車の轍はたぬしすゝみ行世にさかゆるん文のはやしは

藤川 文造 七十七翁

皇み子の見そなはしけむ水莖の跡は畏く千代もくちせす

妹尾 廣一郎 七十二翁

はま千鳥ふみし路こそ久しけれ昇る朝日の御影添ひ來て

同 人

賢くも天つ日繼の御光臨圖書見るたひに伏しをかむらむ

山本 文次郎 七十二翁

古代の道を尋ねて新しきよにふみ見るそめてたかりける

林 武彦 七十一翁

雪を積み螢あつめて見し書のふごのに皇子の光ごこめむ

桑原 正雄 六十一翁

雪をつみ螢集めて見し書を日嗣の皇子のひかりにそ讀む

同 人

日のみこの高き光はごこしへに千卷の書をてらしぬる哉

津島 正己

天さかる千島の海士の里までも書の林のさかぬつる世か

三好 良行



かき奉る書は千載に朽ちさらむ日嗣のみこのいてましの跡

大須賀 貞 壽

大君の御代の光にいにしへのうもれし文もあらはれに晝

多田 茂太郎

心して祝へ諸人ふみ見するいさをは代々に朽せさりけり

矢野 藤次郎

たれもみな心をみかけ書見つ、鏡の影のくもりなき世に

森口 猪三郎

君か代のふかき恵に茂りたるふみの林にあそぶ御世かな

三木 忠 誼

絶間なく人の来てよむこの館の書こそ御代の光なりけれ

辻 春 翠

古事もつはらくに濱千鳥ふみし浦わの千代にさかえむ

土井 猪三郎

うちそこの文を集めて國人のころの玉をみがくこの庭

石川 重吉

雪を得て天翔るへき人も出ん海人か里にも文をよみなは

石井 數 市

今度の高き譽をかきのへて圖書のやかたを祝ふ今日かな

荒木 彦七郎

たふごしの書に光をいやませり日嗣のみ子を仰き迎へて

乾 辰

古への聖のふみは後の世を照らすかたみこ仰かれにけり

尾松 政次郎

陸奥のまゆみの紙に書きのこすふみかさたかに榮ふ庵哉

橘 繁三郎

旭さす鎌田の里におひたちしふみのはやしは賑ひにけん

鳥取 規矩次

ごこしへに君かはくみの教草世にも稀なる實をそ結はん

鳥取 空 次

世ご共にいよ、榮えむ坂出の里なるこれの書のやかたは

古川 清六郎

數多き書の中ても日の御子のみそなふふみそ尊かりける

松浦 健 雄

春の日の光あふきて千代までもよを照らすらむ文の林は

七條 梅之助

する墨の色に情のこもるらむかをりも高き水莖のあこ

十川 俊 榮

千早振神代の書をくりかへしをしへこなしし國を榮ゆる

藤澤 行 平



ひさかたの天津日嗣の榮行も御國の書のあれはなりけり

青井 武太郎

かきつめし言葉の花の數々は千年の後も香ににほふらむ

草薙 助吉

植おきし書の林に皇御子のめくみの露のかゝるかしこさ

綾井 幹治

いさをしを世々にのこせし人間は、皆書廣く繙きにけり

秋山 荒次郎

畏くも日嗣の御子のいてましを千代に傳へん水莖のあこ

中山 宇太郎

百鳥も千代萬代を歌ふなり日影あまねき書のはやしに

中尾 束

史蹟にもかき残すらん光榮のふみよむ館は千代に榮ねて

荒木 篤次郎

皇太子のめくみの露にうるほひて書の林はいよ、榮ねん

岡坂 峰造

日の宮の臨み給ひし此館は圖書あさる人の榮ね來つらん

鷹尾 新太郎

玉藻よし讚岐の國の民草はふみのはやしのかけに榮ねん

鳥取 宇平太

千萬のそのまきしこの葉は内外の人の玉の聲なる

森 勝治郎

山の奥島の果までふみよまぬ家こそなけれ君か御代には

小川 駒藏

しけりゆく文の林に入り立ちて人こそまなへみ世の恵に

平尾 龜太郎

西東あらゆるをしへあつめてそふ美の林となれるこの館

平岩 照治郎

幾千代の後の世までも眞心を人に傳ふるふみのみちかな

近藤 忠三郎

あきらけき日嗣のみこのみ光は文見る人の道てらすなり

清水 英實

萬代もかけて榮ねむ御車をむかへまつりし文のはやしは

野溝 嗣興

古へのかしこき道をふみよこ傳へけらしな水莖のあこ

山本 勇

朝日子の光仰きてのこかにもふみの林のはな咲きにけり

日下 鶴二

進みゆく御代にあふ社うれしけれ書の林の花もひらきて

菅 朝一



皇みこのきてみましを始めて千代も榮む文の林は

植松熊雄

春の日のひかりをあみて阪出のふみの林もたち榮むけり

中村一也

高光る日嗣の皇子のいてましを書に記して千代に傳へむ

笠井兼吉

開けゆく御代の光のさしそひてふみの林もたち榮むけり

森米三郎

玉鉾のみちのしるへの葉こてあつむる書の數もしられし

大石平次

種々の書も幾代に祝ふらむ日の御子仰くけふをかたみに

吉田一三正

朝日影匂ふほまれの文殿につめる書こそ世を照らすなれ

三好長豪

はる宮もわたり給ひて香川なるふみの林の花も咲くらむ

菅原大哲

春の日の光をうけし文のまご千年の後も世を照らすらし

七條いつ子  
八十二嬢

わけいりて言葉の花も得てしかな茂りに茂るふみの林に

竹内嘉代

分入りて見るもかしこし日の御子の光をうけし書の林は

兒島瀑子

大皇子の見そなはせしは世の人をすむるふみの力也覺

難波春惠

日のみこを迎へし是の文殿はちよに八千代に彌榮ゆへし

大野よしゑ

明けきみよの光にてらされて聖のふみそいごたふごき

内田恭子

世の人の心の玉を磨けこや春のひかりをふみにそふらむ

上野まさ子

世の人を正しき道にしるへする書こそ千代の寶なりけれ

越智津千代

かきりなき智惠の泉ご仰かれて文のはやしの色たまふごし

大森泰子

春の日の光にあひて茂りあふ書のはやしの色そまされる

正木鹿子

日のみ子の光をそへて萬世もさかぬゆくらむ文の八千卷

藤澤千代子

かすくの書を集めて人のため學ひの道を開くめてたさ

向山徳子



積餘る内外の書もかゝやけり天津日嗣のみ子をむかへて

乾山 富士子

例なき譽也けり日のみ子のみそなはされし書のまきまき

宮武 秀介子

限なき教の道もかく書のさかゆるみ代をしるへにはして

林木 靜榮

御車をこゝめましつる跡さほく書見る人の世々に仰かむ

友近 壽美子

皇御子のみいつは長くかゝやきて書の林は千代に榮ねん

綾井 功子

高光る日の大ふみに照りはわていく萬世に御代は動かし

綾井 最子

世の人の爲にあつめしこりくの書こそ君か惠なりけれ

新名 民子

水莖のかき集めたる諸ふみはひらけゆく世の基なりけれ

野口 貞子

世の人に玉磨けよと書を數多見せつる家の名は光りけれ

宮野 光枝

皆人の共に勵みて限なきふみのはやしをたごるめてたさ

越智 千代子

年毎に數まさり行くふみ草をあさり得易きこのやかた哉

秋山 きぬ子

日の皇子を迎へまつりしこの文の館は千代に彌榮ゆらん

今里 くら

人の行くまことの道を藻鹽草かきて残せる書そめてたさ

平岩 弘子

茂りあふ文の林はあつさゆみ春の日かけに色はぬにけれ

今上 菊子

年々に書の林の奥ふかくすゝみ行く世そめてたかりける

阿河 ふさ子

名に高き文の林の奥にこそ千代も榮ねむ花はさきけれ

日下 よし子

綾川にすむや千鳥のあゝめて千代さかゆらむ文の林は

七條 こよ

かきりなく文の林のしけりあひて代々に残らむ人の功も

中村 富子

千萬の内外の書を集めてしいさをも共に世にのこるらむ

北原 岑子

皇御子のみそなはされし文殿の書社千代の龜鑑なりけれ

乾代 照野子



麗しき書のはやしに咲く花をてらす日影そ長閑かりける

平井 たつみ

いにし人の書き給ひける水莖の跡こそわきて貴かりけれ

北原 まつ子

日の本の書學はむごご國の人もより來る君かみ代かな

愛媛縣 正七位勳七等 西原 義三郎

かしこくも御代の光は此館の山なすふみの上にかゝやく

正七位 富田 政輝

君か代は千代萬代ご開け行書のはやしのかきりしられし

正七位 宮崎 丹彌

世の中の書をあつめて諸人のまなひの道を開くめてたき

加藤 乘了

世の爲に百千萬の書を積みて見するも國のたから也けり

眞木 松太郎

あなからに世のこころをしり得るも即ち書の功也けり

矢野 稜威雄

千萬の書を集めて世の人の智識すゝむるわさそめてたき

同 山し

文字をうるて培ひぬれば君か代は書の林も日に茂りつゝ

梅戸 鶯宿

諸の書を集めてをさむなるやかたそ國のたからなるらん

中川 義也

千萬の書を集めしふみやかたひらけゆく世の寶なるらん

永井 文平

日の御子のひかり至らぬ方もなし書の林の奥も照らして

岡部 隆吉

春の日の光にあひて一入のふみのはやしの色もこそませ

田窪 八束

劍をは鞘にをさめて坂いてのふみのはやしに駒つなく哉

田窪 いこよ

位山のほり得易し君かよはふみよむみちのいよゝ開けて

越智 君代

千代かけて人の葉こなりぬへき書こそ御世の寶なりけれ

日野 實子

成業のひまある毎に書よみていよゝはけまむ國のみ爲に

福岡縣 從七位 大久保 千大濤

福岡縣

大

大

大

大

大



上つ世のおきて傳へて人のためいこゝ尊きふみの道かな

正八位勳八等  
寺入島 静次郎

世の中の高きいやしき別ちなくあふかさらめや文の光を

同 じ 人

君か代の惠のつゆにうるほひていやさかゆかむ文の林は

藤村 實 箴

茂行くふみの林に培ひしきみかいさをもあらはれにける

片山 貞子

ゆるきなき國は榮はて年々にふみの林のしける御代かな

尾形 静子

春の日の光のあはるる人のふみの光の御代かな

佐賀縣

田代 八 束

おもふこと萬代までも傳ふへき書のいさをそ尊かりける

正七位  
稻 生 一 穂

千萬の書もあはるる人のふみの光の御代かな

熊本縣

永井 文 平

君か代の文の林にわけ入れはこころはなそ咲匂ひける

平野 梅四郎

繰返しふみ見る人の數そひて御代の光もいやまさるらむ

吉 永 秀 教

日の皇太子の御代かな

宮崎縣

新入 金太 頼

日のみ子のみ光うけて隈もなく書の林はさかゆくらん

正六位勳六等  
永 友 宗 平

鹿兒島縣

日のみ子のみそなはしつる種々の書こそみよの譽也けれ

濱 田 幸 雄

冲繩縣

綾川の千鳥のあこに見ゆるかな神代なからのみ代の榮は

兼 島 景 福

北海道

綾河や遊ぶ千鳥の足跡をふみ見る世こそうれしかりけれ

正六位  
宮 澤 春 文

多々那波る書のむら雲茜さしかくて明行く御代の空かも

正六位  
村 田 正 夫

さしのほる朝日をうけて奥深き書の林もかゝやきぬらん

從六位  
堀 野 林 治



畏くもみいつ仰きてつむふみの譽は高しきぬきふしより

高畑 たね子

けにたから藏さあかめん世の爲に開きまつれる書の館は

鎌田 五夫

はみしらも文の林をわくるまで恵みあまねく君か御代哉

豊島 琉寶

榮ゆくみ代の光りに照されてふみの林の茂りゆくかな

吉川 利一

日の皇子をむかへ奉りてけふよりは書の林の彌茂るかな

中西 幸安

日の御子の尊き御言かしこみて文の林にいよはけまん

支那

畏くもいてましまさる日の御子の御かけは書の輝にこそ

同

長へにしろしをあげよ文の園日嗣の皇子の御あこ拜みて

鎌田 さこ子

千代までも文の林の榮ゆらむ日嗣の皇子の御かけ仰きて

鎌田 頼子

ここしへに仰きまつらむいてましの此畏さを書に傳へて

鎌田 晃

書のわさいやすめんご御子の宮臨みましつる事の畏さ

鎌田 光江

皇御子のめくみの露にうるほひて書の林はいや榮ゆく

鎌田 勝太郎

日の御子を迎へ奉れる今日の榮世々に傳へん文に記して

鎌田 よしゑ

鎌田 憲夫

鎌田 憲夫

鎌田 憲夫

鎌田 憲夫

鎌田 憲夫

鎌田 憲夫

鎌田 憲夫

鎌田 憲夫



長へに忘るへしやは朝日さすふみの林のけふのよこを

鎌田 絢子

諸共にいさ祝ひてむ書くらのけふの譽をこころしへにして

鎌田 榮

日の御子を迎へまつりて千萬のふくらの文も光そひけり

鎌田 豊太子

千介まじり文の林の榮のさき日嗣の皇子の晴まき御ちり

鎌田 光

身へこころしきまもり文の園日嗣の皇子の晴まき御ちり

鎌田 隆平

日の子をむかへまつりてけふよりは昔の朝の御ちり

鎌田 泉

日の晴子の尊き晴言やうごふ丁文の林の御ちり

中 須 兼若太

庭もせにかをり深めて菊の花幾千代までもさき匂ふらむ

津久井 金太郎

庭 菊

霜日和志津三郎をぬくひ見る國土か庭のしらさくのはな

東京府

君か代の光をうけて秋久にさきまさるらしその、むら菊

正二位勳二等 二 條 基 弘

いてまし、秋をしのひて年毎に咲匂ふらむ庭のしらさく

從三位勳二等子爵 前 田 利 定

いてまし、日嗣の皇子を秋毎に祝ひてにほへ庭のむら菊

從二位勳一等子爵 松 平 乘 承

菊さきて一しほ秋のいろ深きこの庭にして御代祝ひけり

從三位伯爵 松 平 頼 壽

日の皇子のいてまし、より庭の菊薫もそはる心地社すれ

同 夫人 昭 子

風薫る庭の眺はあかなくにまたさきにほふ菊のくさく

從四位伯爵 二 荒 芳 德

正三位子爵 入 江 爲 守

正四位勳二等 谷 森 眞 男



一入の香ににほらむなにしおふ君か園生の菊のさかりは  
處せき庭にあふれてさきにけり千代の香ふかき黄菊白菊  
この庭にみいつの光さしそひてきくも千年の色に匂へる  
美めくみの露にぬれにし菊の花庭の外まで香に匂ふらむ  
年毎に彌榮えゆくひろき庭ひろらにさけり黄菊しらきく  
庭の菊今さかりなり皆人のめての心もいまさかりなり  
おほみ子のめくみの露をみなうけて庭一面に菊の香高き  
朝清めするや箒の枝にふれてこほる、露の菊の香のよき  
風かをる園生にさける菊の香は雲の上までや匂ふなる覽  
種々に心をこめしほこみえてかをりこなる庭のしら菊

同 夫人

美與子

正四位勳二等

田内三吉

正五位勳二等

加藤正義

從三位子爵

細川利文

正六位子爵

河緒實英

男爵

東久世秀雄

男爵

福原俊丸

從四位勳四等

今井彦三郎

從四位勳四等

藤崎虎二

勳四等

鍋島榮子

美しるしの花も盛に匂ひけり日嗣のみこのいてましの庭

正五位勳四等

坂正臣

吹く風も香に匂ひけり玉しきの庭のむらきく花の盛は

正五位勳五等

桑野鋭

いにしへの根さしなからも新しき匂を見する庭のしら菊

正五位

松本愛重

その折の妙なりし香によそふへく菊をは園に栽おほしけむ

正五位

佐藤球

秋毎につくりたてつる庭の菊今年そ君かみめにいりぬる

正五位

尾上八郎

秋毎ににほへる庭の菊ながら今年の花はここさらにこそ

從五位勳五等

三雲敬一郎

菊の花すきまなき迄うゑたれには、千年の林なりけり

正六位勳六等

大河平隆

みめくみの露もかゝりて香に匂ふ風なつかしき庭の白菊

正六位

芝葛盛

いく千代をつほみにこめてにほふらむ盛は久し庭の白菊

正六位

宮岡慶子

ひむかしの籬の菊の香を清み庭のあるしの夢もかをらむ

正六位

鹿兒島虎雄



さき、そふ黄菊白菊さりく、にちよを捧けて匂ふ庭かな

正六位勳六等 東 胤徳

松はやし千代の影しめて君か庭にけ高くさける白菊の花

從六位 西 川 義方

いひの山津山笠山かさしつ、八千代をしむる庭の菊かな

從六位 三 矢 重松

大君のつきぬ恵をあふけこやしるしの花を庭にうゑけむ

從六位勳六等 加 茂 百樹

咲にさきてかをりも高し綾河のあやにかしこき白菊の花

勳六等 三輪田 眞佐子

この庭に迎へまつりし御車の輪のこき菊の花はさきけり

正七位勳七等 鈴 木 善建

初霜のうすけはひしてきよき香の風も目出たき庭の白菊

正七位 林 園 應

数々の小草はあれこの庭の菊にまされる花なかりけり

從七位 林 有 隣

風さへも香へる庭さきくの花きらめきわたるつゆの光に

正八位勳八等 岡 田 有 邦

ゆたかにも黄金白玉うち集へさかゆる君が庭の菊のはな

正八位 中 川 興 功

大みよのちこせの秋を君か庭にさきにほふらむ白菊の花

子爵母堂 松 平 岳 子

秋の日の匂ひか、やく庭にして黄菊しら菊さかえ久しも

大河内 國 子

庭のおもにおりある鶴の毛衣をさりかさねたる白菊の花

原 宏 平  
八十六翁

君か庭にちよの秋へむ菊の花花のまここを香に顯はして

跡 見 花 溪  
八十四姫

おきあまる露に朝日の影さして菊のか清き園のうちかな

本 居 五 鈴

いてましの恵の露に菊のはな香にこそほへ庭の内外に

平 田 盛 胤

大君の恵の露にうるほひてかをりゆかしき園のしらさく

三輪田 元 道

秋されはにほはぬ里はなけれも風かをる園の白菊の花

今 泉 定 介

この庭の去年の秋をもしのふ哉白菊の香を忘れかねつ、

與謝野 寛

うつし植ゑて咲出しより長月のなかくそ匂ふ庭のしら菊

山 岸 瘦 石



紅の菊うす黄の菊もあはれなりしら露かちのわか草の庭

與謝野 晶子

名にしおふ風かくはしきこの園の菊の盛は久しかるらむ

武井 縉子

年毎に匂へる庭の菊の香をそへたる去年の大みいてまし

勝田 圭通

大君の御代のさかえをここほきてさき匂ひけり菊の花園

谷 森 建男

咲匂ふ色もちくさに御園生のきくの盛そめてたかりける

谷 森 淳子

咲きいてし園生のきくのこりくりに盛めてたき花の宿哉

谷 森 登子

庭の面に移しうゑたる菊みれば千代の色香を限しられぬ

矢 島 鈞 七十四翁

皇御子の玉のみあしの跡こめて千代までかをる庭の白菊

林 清子

庭の菊薫みちつゝ皇みこのいてましをこはに思はする哉

秋山 光夫

四方のうみ嵐は絶えて我庵のそのふいろこる黄菊しら菊

井上 雅二

ほからく朝日子のほり此庭の黄菊しら菊かをり高しも

友野 欽介

庭の面の菊さきしよりしをり戸の明暮露にぬれぬ日はなし

岡本 武吉

千代へても薄れさる覽移しうゑて庭にみちたる菊の匂は

首藤 眞寛

時雨にも霜にもあせす千代かけて朝日に匂ふ庭の白きく

星 野 久

露の玉かさしてさけるしら菊に千代の榮のみゆる庭かな

白井 峯

いもこ背の君か千歳をここほきてさかぬ久しき庭の白菊

丹波 貞子

菊の花彌々高くかをるらむ庭のあるしのよきつちかひて

青木 菊枝

かよひ來る鹿の上毛の星はかり夕やみてらす庭の白きく

渡邊 刀根次郎

うきものこおもひし秋も中々に色香めてたき庭の菊かな

森田 助作

春の日の光をうけて庭の菊千こせの秋もかをり増すらむ

片岡 哲



つちかひし人の心をにほはせて庭もせにさく菊の花かな

加納彦松

飯の山きよく晴れたる秋かせにかをりわたれり園の白菊

弘田由己子

香風園菊のあき露玉こひかる日つきの宮のみゆき仰く日

白岩八つや子

天つ日の照せる方に向ひけりまかきの菊の花もつほみも

半井榮

庭もせにうゑたる菊の花みれば千年の奥も千年なりけり

武立真

のそまし、日の大み子に庭の菊千年の秋をまつ捧げけむ

印東益子

日の御子のいてまし仰くよき庭にここほき顔の黄菊白菊

武者種彦

秋の日のにはへる庭の小流にかけをひたせる白菊のはな

高木真藤

小春日のめくみうけつ、咲きいてし黄菊白菊香はしき庭

佐藤宗次

秋の日の輝くもここに香を高く庭ひろく、咲きみてる菊

大村八代子

庭菊のかよりもたかき東宮の行啓あふくあやのまつやま

山下谷次

讃岐富士見渡す庭に咲く菊は雲のうへまで香の通ふなり

北濱千吉

年ここに千代の白菊植ゑて盡せぬ庭の秋をこそ見れ

岡田玉翠

花にのみ限るへきやは敷島のやまこ心は菊にもありけり

福井大甫

日のみ子の御惠ふかくおく露にかをりも高し庭のしら菊

福井安佳

言にこそいひあらはさね喜ひの色に溢れて咲きさかる菊

林本遊入

大み子の渡り來ますごうるはしみ菊さへ露にぬれ輝けり

同田し人

菊のかそかをりみちける風そよくにはの園生の花の盛は

正五位勳五等 木野戸勝隆

千代かけて齡のふてふ菊の花まかきのもここに咲ひそめ

從六位勳四等 佐藤信有

千代かけて齡のふてふ菊の花まかきのもここに咲ひそめ

從六位勳四等 佐藤信有

京都府

京都府



眞心をこめしかひあり宿の庭にかをりも高き黄菊白きく

從七位勳八等 玉木捨吉

日のみこの千代の例に匂ふらしおほみしるしの庭の白菊

從七位 鈴鹿直益

飯の山いひ知らぬまで吹く風の匂ふは園の菊のさかりか

堀 永休

うるおきて人のめてつる白菊の花の色香は千代も變らし

吉田慎平

色々に花はかはれど庭の菊めてるかをりは一つなりけり

杉本米軒

ちよの上に千代を重ねて庭の面に年々きくの盛をや見む

下橋敬長

色も香もゆかしき菊の花咲きてなかも秋の庭を嬉しき

三輪長太郎

露深き庭の白菊さきにけり千代もありたき老のおもかけ

岡田梅仙

庭櫻かへり咲とも八千歳のにはへるきくの花そめてつる

小島小兵衛

幾千代の秋を契りて我庭のかきねにさける白きくのはな

岡本爲治

朝清めなしたる庭にさくみれば千代のかきりも白菊の花

高木善立

しつかさのまこと覺ゆる庭の面は野分の風もしら菊の花

前川後河

日の御子の光にあひてつちかひし人もはえある庭の白菊

浅野里子

培ひししるしのみはて雲るにも色をしらるゝ庭のしら菊

竹内幾子

おふしたてし庭の白菊ひのみこのみ袖の香さへ深くそふ覽

福田絹子

秋深き蓬かにはの露の上にかをりそへたるしら菊の花

小泉定子

大阪府

いく秋もほまれたの花ごにほふらむ御袖ふれてし庭の白菊

正六位勳四等功三級 有馬太郎

吹上の白菊匂へわたのこもみくにの風のかよふかきりは

早川清吉

世にすねて黄金白銀をしまねど庭にうるけり黄菊白菊

島山重孝



秋ここに思ひ出てやかをるらむほまれもあまる庭の白菊

小野利教

もみち葉の赤き心に神懸や色そふきくの千代のほきこ

中西靈州

咲ほこる黄菊白菊いつれをは庭にめてなむ花のさかりは

同 黒し太人

秋ふかく寒さおほゆる此日ころ庭に咲きける千代の白菊

辻田清職

海山の眺めそなはる時雨亭庭のしらきくいまさかりなり

同 泉し太人

綾川の千鳥鳴く音をきゝなからねさめて見れば庭の白菊

谷地六三郎

けふりたつ坂出の濱に藻しほたくあまの伏屋に白菊の花

同 内し太人

日の御子を迎へまつりし庭の菊時すくれこも盛り也けり

谷野禎藏

時雨にも色はかはらて風かをる園生にさける菊の床しき

海野恭基

御庭には香もたかく白菊のさきて行幸をまつしこそきく

豊島孝造

七十八翁

君か代を千世こそ祈る吾庭の菊の盛りを見るにつけても

宇田川文海

日の御子を迎へまつりて色も香もちこそ共捧く白菊

井上寛次郎

秋のきてほこりに咲く庭の菊培ふ君のいさをなりけり

戸田養

君の庭東まかきのそれならていろこりんに菊を匂へる

同 黒し太人

あなからに讃岐のふしもみえそめて千代をかさせし庭の白菊

宇野宗観

すめみこを迎へし庭にさく菊は眞の千代の香をや捧けし

菅野定親

秋毎に庭のまかきの菊のはな老せぬやこゝ千代も匂はむ

石渡ます子

千代やちよ榮ゆる庭の菊のはなをいせず匂ふ宿そ久しき

岩崎花子

さきしより日数はふれこ色も香も老せぬ庭の白きくの花

深井つね子

美しく秋のひさしにいろはえて庭のむらさく咲競ふなり

和野田のぶ子



日のみ子のみけしの袖にかをりけん時雨の庭の黄菊白菊

久保井 敬子

君かすむ垣根にさける白菊は千代の薫りのいご高くして

柴谷 鶴子

この庭にこりくく匂ふ菊の花君かほまれをほこり顔なる

神山 ござ子

静なるにはの垣根にかきりなく千代をかさせし白菊の花

田中 嘉登子

日の皇子の御跡残れる庭のものにかをりもたかき白菊の花

鹽田 由美子

大みこのみはたの色に匂ひつゝ咲くかひありし庭の白菊

神奈川縣 山川 鶴市

幾秋をかひある花と咲きながら菊は今年に似る色そなき

同 田し 人

いやさかるみこいてましを思出に高くも匂ふふみ庭の菊

高橋 雅晴

御園生の菊の薫のうつろひて千代をこめたる色そ床しき

末田松 文正

さかゆかむ君かためして咲そめてちる事しらぬ庭の秋菊

藤原 よの子

芳はしきそのここ揚は庭に咲く菊より高く世にかをり覺

正五位勳五等 椿 時中

君か代を八ちよこいのる忠實人のはの白菊花さきに覺

正六位 藤 卷 正之

咲匂ふ菊のこりくくうつし植て庭は千歳の秋をしめけり

從六位勳六等 加藤 正誼

ふく風も匂へる園さきくの花今年はわきてさき誇りけむ

從六位 矢野 豁

色はみし庭の木の葉の散り初めて籬にさかる菊の花かな

勳八等 杉山 健吉

日の皇子のめくみの露に色はえていよく匂ふ庭の白菊

戸田 稔

天皇の御子を迎へて千代の香のいよく高き庭のしら菊

稻田 茂樹

おく露に光をそへてかきりなき秋をしめたるやこの白菊

野尻 金次郎



九重のみ庭にさける白菊は君か千こせのしるしなるらん

同 人

九重の匂ひにましてこの宿のほまれは高き庭のしらさく

前田 襄

日の御影さして榮ある庭の面の菊の花こそ千代も薫らめ

岡本 祐喜

日のみ子のみめにこまりておく露も光そへたる庭の白菊

山邊 定子

大皇子の光迎へてみめくみのつゆのいろそふ庭の白さく

長崎縣 土肥 通邦

我庭の籬のかけにおのつから咲きたる菊のめつらしき哉

新潟縣 澁谷 豊次

庭もせに黄菊白きくこきませてちこせの富もあまる宿哉

小宮 陞

塵ひこつこゝめぬ庭にさきいて、うつろふ色も白菊の花

橋本 時次

黄菊うゑしら菊うゑてしろ金もたかねも庭にあまる宿哉

式場 益平

世の塵のかからぬ宿の庭の面にさく白菊も千代の友なる

從五位勳六等 金 鑽 宮 守

おのかしし千代をきそひて庭の面にさき匂ふ哉黄菊白菊

正八位勳六等 井 岡 良 明

つちかひしそのかひありて我庭を飾るも嬉し黄菊しら菊

正八位 桑 田 良 隆

天地のあらむ限の菊のはなさきにほふらむこゝの重の庭

磯 部 重 浪

ささみちていろ香も高き菊の花間垣もなさて廣き庭の面

勳八等 砂 長 彦 四 郎

大君のみゆきここほくかたみこて千代の香深き庭の白菊

中 村 良 大 達

年毎に色香まさりて咲く菊の花こそ庭のあるしなるらめ

藤 尾 仙 太 郎

葉にむすぶ露にも千代の色はわてさきそめにけり庭の白菊

同 人 七十八翁

三十九



皇國の御旗の雫落かかりいよ／＼にほふにはのしらさく

原 恭平

香も高き籬の菊の幾千代にかはらぬ色の榮にまさるらむ

荒木 山太喬

つくるはぬ庭にさきても白菊は千代の香深き匂ひなり亮

塚田 覺太郎

九重の御庭に咲ける菊の花色もかはらてにほへこそ思ふ

堺本 玄四榮

たくひなき色香なりけり名も高き君かみ庭の菊の花かも

橋爪 力太郎

一もこの庭の白菊さきしよりあまたの人の訪ふを嬉しき

藤尾 梅興

うつりゆく秋のならひもしら菊の花こそ庭の主なりけれ

中澤 厚村

色も香もこの上なしさきくの花匂ひもひろき庭に餘れり

同 人

皇御子のみそなはまし、書殿の庭に千世へむにほふ白菊

岡田 順達

國民のこゝろに移るさきくの花千秋にほこる末そたのしき

岸 鐵三郎

庭の面のさきくのさかりは葉にむすふつゆの光も黄金白金

藤尾 武一

あまつみ子立よりまして君か家の庭の白菊千世に榮む

原 千恵子

千代ふへき色香もふかく庭の面の松の木陰にさける白菊

藤尾 よし子  
六十八嬢

さきそめし唯ひと本の菊の香に千代をしめたる庭の面哉

井岡 節子

久かたの雲井の庭のまつかけにちよをしめたる菊の一本

藤尾 秀子

八千草のはなさき匂ふ庭の面にあるしかほなる黄菊白菊

藤尾 さく子

添竹のうき節さへもしら菊のはなのよはひや長つきの庭

藤尾 萬子

群馬縣

菊の爲こゝろつくせは我が爲にはなさきにほふ庭の面哉

大野 泉  
七十一翁

いろ／＼な菊を庭面に植そへて先つ面白き花をこそ見れ

金井 源一郎



すめみこの御幸迎へて咲き匂ふきみかみにはの黄菊白菊

細野 仲次郎

かをり來る風を知るへに尋ぬれば翠の松の庭のしらさく

旭 良道

みしるしの光は花にそはりけむひこきはめたつ庭の白菊

同 日し 美人

日の御子もみそなはしけん幾千代のさかり久き庭の白菊

宇多 琢磨

皇みまのみそなはしたる庭の菊千年はまさに久しかり

印 東福郎

うるはしき心のはなそ匂ふなるきみみそなはす庭の白菊

境野 彌三郎

世の中の秋に寂ひにし草木にもそまらぬ庭の白菊のはな

黒澤 鶴吉

筆ごりて庭の垣根を眺むればのこかに匂ふしら菊のはな

黒澤 東馬

訪へはあきの日和にしつか家にはに花咲く黄菊しら菊

同 日し 美人

御の面のさかしのさかしの光の光の千葉縣

蘇 武 九三郎

治れる御代の光のさしそへてつゆの玉しく庭のしらさく

鈴木 保司

翠さき老松めくるひろ庭のたかくもかをるしらさくの花

高木 京次郎

山松の翠のいほのそのうちにき菊しら菊さきほこりけり

鈴木 裕二

池水にさぬきの富士の影見ゆてちよの香ふかし庭の白菊

寺本 縫右衛門

あしたつもおりて遊へる廣庭のちよもごにほふ白菊の花

石宅 正作

汚さしな日嗣の御子の光そふやこのほまれの白菊のはな

上代 千代五郎

うつし世の塵の籬にへたてつゝ濁に染まぬしら菊のはな

林 東次郎

咲ききそふ千草のはなも多けれこ一入まさるにはの白菊

飯田 信三郎

みるかきり趣そへつ庭もせに秋をかさしてしらさくの花

高木 守中

あしたつのおりて遊へる庭見れば菊の花こそいま盛なれ

飯田 太平



飯の山朝風おろすひろにはの池のほごりにかをるむら菊

高橋 高風

おきわたす露をかさして白菊のころせけにもかをる庭哉

本城 巳之助

秋毎に色香勝りて咲き匂ふ庭の黄菊にあきの陽かやく

高橋 刀三畔

あしたつも遊へる庭の白菊は千年をかけて香に匂ふらん

向後 勝六一

日の御子に捧けまつらむ幾千代の齡も籠る庭のしらさく

野口 千哲正子

皇太子のめくみの露にうるほひて鎌田のにはに匂ふ菊哉

茨城縣

從五位勳五等

黒澤 義清迪

皇太子のめくみの露にうるほひて鎌田のにはに匂ふ菊哉

栗山 親之

皇御子の惠のつゆにうるほひて千代の香高し庭のしら菊

市村 ふき子

なにしおふ香風園は庭もせに黄きく白きく咲そほこれる

栃木縣

栃木 親之

みめくみの露にさきつゝ庭の菊千年の秋も世に薫るらむ

戸田 忠友

我宿の垣根にさける菊の花なけやりなれど香の深くして

柳田 與一郎

千代の香を君にさゝけてみ幸まつをしへの庭の白菊の花

豊田 喜代治

咲匂ふ香こそねならぬ日の御子の立たしゝ庭の白菊の花

萩原 藤作

今よりはほまれも高く匂ふなりみゆき仰きしこの庭の菊

荒川 辰之進

鉢植の黄菊の花は霜かれていまさかりなり庭のしらさく

土屋 福藏

君か代の光さこもに匂ふなりみにはに咲ける黄菊しら菊

渡邊 長吉

庭の面にさきて匂へり名をねたる國のつかさの白菊の花

間瀬 定重

をさめ子かまなひのひまに培ひし庭の黄きくの花盛なり

直井 喜一郎

諸人のそてをひきけり秋はれていまをさかりの庭の白菊

田野邊 政次郎



うつろはぬ色香こめきてひな鶴のおりある園の白菊の花

久保井 倉大吉

いたつらにをりてかさせ庭の菊思へは御代のしるし也亮

島田 加茂

ふく風の薫るもうへなけさ見れば庭にさきたり白菊の花

樋口 忠延

此庭の秋そ待る、榮なりし去年のこころもきくを嬉しみ

伊藤 盛次

たきみつの音もすみたる朝庭にさけるもきよし白菊の花

倉田 金十郎

美しき庭の白菊めてませこみいてまたれし去年の秋かな

鈴木 重綱

さまざまの花さく中にこりわけて菊こそ庭の千年もらめ

野田 菅麿

千代かけて薫らさらめや大御子のめてのすさひの庭の白菊

岡田 辰次郎

御軍をならしにはに駒こめてめてたまひけり菊の盛を

中野 周次郎

此庭を雲るご菊も思ふらむほまれはやこのあるしのみかは

尾崎 忠助

今年よりかをりゆかしく匂ふらしちよを捧くる庭の白菊

松浦 廉之助

こけおほふ庭の池邊に根さして千年に匂ふ菊の一と群

中込 劔治

咲きしよりめつる日かすもなか月の盛久しき庭のしら菊

内山 善市

安見し、我日の御子のみそなはす庭の白菊千代も榮えむ

石津 一郎

語継き千代に傳へよ菊作る庭のあるしのおもておこしに

羽田 一成

しらきくにおきたる露の輝きて千代の色見ゆ君か庭かな

内田 浦次郎

山梨縣

從七位勳七等

動八等

動八等

動八等

動八等

動八等

動八等



秋ふけて千草凋れし庭の面にひこ本かをるきくの氣高き

同 田し 齋夫人

ひねもすのわさなくさめて庭もせに香りも高き白菊の花

勳八等 橘田 徹平

みしるしこさなからみえていましの御跡の庭に残る白菊

勳八等 輿水 徹

星こみる光もさして菊のはなさきたる庭は雲のなしける

宮川 正彦 七十七翁

色々の木草のはなもましる世にいつもかはらぬ庭の白菊

櫻井 義令 七十五翁

久々に來ます君をは迎へんこ庭の黄菊を折りて活けたる

渡邊 春英

つちかひしきみの心も匂ふかな色香も高き庭のしらきく

宮川 牛巖

ほまれある此よき庭に處わて千代の香ふかし白きくの花

竹川 文平

千代かけて色もかはらし玉敷のみ庭に匂ふしら菊のはな

中川 玄隆

みめくみの露に色さへまさりけり庭もせにさくきく白菊

河野 輝身松

訪ふ人の袖にあまりてにほふ哉庭もせに咲く白菊のはな

久保 國光

名にしおふ鎌田の庭に萬代の根さしかためて匂ふ菊かな

赤尾 小三郎

みくるまのあささへ見わて君か家の庭の白菊世に匂ふ哉

守家 啓作

名にしあふ年ふる庭にこころわて雲井にたかく匂ふ白菊

赤尾 金太郎

みしるしの影こころ見れ玉しきの庭のまかきの白菊の花

橘田 連

飯野山津山笠山もみちしててりかはしたる庭のしらきく

網野 幸枝

おく露にいよく清し庭もせに咲く白菊の花のかをりは

橘田 邦子

土かはむ庭のあるしにあぬぬへく八千代も匂へ白菊の花

名取 正代子

大君の千こせちきりて玉しきのはにかすく菊の花咲く

武田 つる子

玉ゆらの露の恵に千代こめて庭のしら菊香ににほひけり

宮川 芳子



根分する頃より心こめたりしきくは咲きけり嬉しわか庭

内田濱子

大坂の下のかきくさきみり名に負ふ園の風薫るまで

滋賀縣

咲みり庭の白きくさきみり名に負ふ園の風薫るまで

今村俊亮

常磐なる松の園生の菊の花にほふ風こそゆかしかりけれ

藤原高樹

庭守の心盡しもあらはれてにほひいてたる菊のいろく

大島一雄

ゆるきなきいへるの庭の菊の花處にかほの色香なりけり

渡邊市造

垣の外に餘る千代の香きこゑ來て庭もせに咲く黃菊白菊

野口宗次郎

薦枕たかき匂ひをいたきぬちよの坂出の庭のしらさく

栗田古根

あまつ日の光をうけてちよまでもいよく匂ふ庭の白菊

野々村久次郎

結ひそへし竹の千代にもならふらむ盛ひさしき庭の白菊

鈴木正俊

香をこめて來つれば君か庭の面にいまを盛る菊の花さく

坂倉信廣

芽生をは庭に移し、白菊はやせてさけこもなつかしき哉

淺野敬芳

せはからぬ庭にもかをり溢れけり千代の籠れる白菊の花

渡邊俊明

小柴垣ひきくめぐりてたか家も庭に菊さくやまもこの里

横井磯一

うるはしき數多の菊を庭に植ゑてちよをこめたる君の宿哉

中島弘海

庵の名の時雨にぬれてひろ庭に露さへかをるしら菊の花

松井太郎

御軍をならず日の皇子いてましの庭に咲きたる白菊の花

山田三秋

坂出はみやこの空に遠けれさにはほひおくらん庭のしら菊

平野丑之丞

いそしめるあるしの心いしろく内外に匂ふ庭のしら菊

平野宗甫





み惠の露ふかければちこそせてかをりは高し庭のしら菊

脇田有年

庭の菊いま盛なり数々のやかたのふみこ香をきそひつゝ

棚橋猪三郎

庭の面にかすさきそへぬ大君の御代のさかりの白菊の花

林田可春

此庭に咲きたる菊のかをりこそ外國までも匂ふなるらめ

平野好子

も草はうつろひそむる大庭に千代をしめたる白菊の花

今井萬之丞

つちかひて花さく時やまちつらむ庭に翁はきくを植ゑつゝ

宮坂朝次郎

いくさ人老のすさひのしら菊は氣高く清き匂ひぬるかな

伊東連城

庭石に趣き添へて咲きいてし黄菊しら菊香くはしきかな

矢島作太良

池水のそこにも花の影みわたには眞白にも咲ける菊かな

金子昌太

世のちりをはなれし庵の庭もせにさきこそ匂へ白菊の花

今井今朝治

おく霜のいたくうつこも君か家の庭の白菊色香かはらす

野入口虎吉

培ひし黄金の菊の花さきてかをりもたかし庭のもなかに

金子喜一

我庭にさき匂ひたる菊見れば命ものふるこゝちこそすれ

陶山傳兵衛

面白く庭の小菊の咲きにけりをりて捧けむ御子の御影に

正六位勳六等 山久下 三三 次

いてましを仰きまつりし此庭に御旗しるしの菊を匂へる

勳七等 安島峻徳

長月の日數重ねて見つれごもあかぬにはのしら菊の花

小倉茗園 七十六翁

千代ふごも老せぬものご聞きつれご竹の杖つく庭の白菊

鎌田徳二

色かはる秋のならひもこの庭の菊の榮は千代をこめつゝ

庄司 六



も、ちくさにはへる中に一きはの花の香たかき庭の菊哉

鈴木隼人

春秋に花は絶ねねむら菊のほふ盛りは園そにきはふ

太田珍平

幾秋もかはらて咲ける黄金菊老せぬ君かためしなるらむ

本田文三介

みそなはず惠の露にたわみつ、色香さ、くるきみか庭菊

安齋恭樹

君か代は花に千させの秋の色をまごめて見する庭の菊園

佐久間與兵衛門

庭もせに咲匂ふこそゆかしけれき、く白菊色をきそひて

菊地九一郎

大君のみゆきの跡のみしるしにさくもかしこき庭の菊哉

安齋極

咲みちて色うるはしく長月の日數にあまるにはのきく園

佐久間富治

九重のにはの白菊年を経ていよ、たかく香に匂ひつ、

森清

天さかる星さはかりにかけ見ぬて榮ゆる庭にしら菊の花

國分三作

大君の玉行く庭の菊の花いく代つきせす世にほふらん

矢内龜太郎

みやひにも作りし庭を狭くして咲きかさなれる黄菊白菊

渡邊吉太郎

大君のめくみの露のほこ、に色香ふかむる庭の菊かな

菅野八郎

君か代と千代を契りておく庭に末なか月もやこる菊かな

吉田春治

内庭のきくのさかりは朝ここに含み心をひらきてそ見る

佐久間與

露霜のおけるおかさる色ならむ村濃に見ゆる庭の面の菊

林平藏

山里の庭のうちにはさきながら雲井にたかく匂ふしら菊

渡邊久壽

雲井なるみ庭に咲ける菊の花露のめくみもそひて匂へり

佐久間源治

宮つ人見そなはせりこ菊の花君か園生に千代そしめたる

國分菊壽



七重八重九重までも匂ふかなきみか庭面のしら菊のはな

本田源助

いてましのこのかしこさを万代にさきて傳へよ庭の白菊

笠原すみ

山里の菊のこころおちもさなは実共さへは青森縣

新田八郎

此庭に日嗣のみ子のおてましを菊もうれしと咲匂ふらむ

佐野正巳

いてましのみけしの袖やふれつ覽ちよの香高し庭の白菊

米谷宗英

さり／＼の色をきほひて咲く花に一入にほふ庭のしら菊

村田妙誠

大塚のもつれ菊の香のたけは秋田縣

新田八郎

苔むせる君かみ庭の白菊は同じかをりもよにほふらん

正七位 龜井寛大造

培ひししるしもみねて此庭の菊の色香も世にたくひなき

藤庭祐大貫

この宿の榮はしるし千代こめて匂へる庭の菊をみるにも

山田魁太郎

かしこくもけふのみゆきをほき顔に咲誇るなり庭の白菊

櫻庭庄藏

千年へん色をたへて庭の菊けふのみゆきにあふそ畏き

青木良藏

咲きにほふ庭の菊にもみゆるかなつくりし人の心高さは

荒谷れつ

花はほふ庭の菊にもみゆるかなつくりし人の心高さは

石川縣

みしるしの旗花やかに匂ひあひて庭も錦ささける菊かな

從六位 中村元彦

畏くも立たせ給ひし庭のはに御子を迎へてさけるしら菊

緒方甲子

いつくしみふかき惠のつゆうけて千歳にかをる庭の白菊

土田貞

九重の雲井にまでも匂ふらん君か園生のしらきくのはな

宮部克己  
七十四翁

大御代の光もそひてためしなきいろこそ見ゆれ庭の白菊

三森宣吉

富山縣

川島



庭もせにさきさかぬたる菊なれば花の盛そ久しかりける

細川秋岳

庭の菊咲匂へるをきつたへしらぬ人まで尋ねきにけり

中 性英

もみち葉も色まさりゆく庭の面にさかり久しき白菊の花

板倉吉三郎

讃岐富士と隣れる庭の白菊は雲のうへまで匂ひあけたり

佐伯友光

みめくみの露に咲そひ庭の外も匂ひあふる、黄きく白菊

同 人

おくしもの寒さにたふる菊の花庭の垣根に千代も匂へり

早川鱒太

皇み子の行啓かしこくきくの花鳥のはてまでかをる萬代

稻田久治

雨かせはなごすさむとも芳はしく庭もせにほふ菊の花哉

遠藤重福

うまひこの手ふりにならふ菊の花庭に園に匂ひ高めて

細谷田力

日のみ子のめくみをうけて千代見草庭紅に茂りこそゆけ

永塚春一

九重の雲の上まで香をあげむかまたのにはのしら菊の花

妹尾游理

すめらきの光あふきて白峰に庭の黄菊やにほひあくらむ

中西勝補

天津日のか、やき渡る庭もせにいろを競ひて薫る菊かな

今岡常野

高殿のまこに薫りをかよはせて匂ひなつかし庭の白菊

岩田八みつ子

よろつ代のみけしのあやの菊の花庭に匂ふそ畏かりける

大森 莊之助

千代かけて君かみ庭に咲き匂ひ色をほこらぬしら菊の花

足立 於登

いつもかく香のかくはしき園なから秋は殊更菊の匂へる

森井中圓

岡山縣

岡山縣

岡山縣

岡山縣

岡山縣

岡山縣



薰り高く代々にさくらむみ恵の露にうるほふ庭の白きく

正七位勳七等  
安原地平

こりくりに黄菊しら菊咲きにほひ秋の錦をはれる庭かも

從七位  
問田正夫

昔より名もいご高きみ園生にみるもまはゆき菊の花さく

正八位勳八等  
前田源四郎

我皇子の立寄ますときくのはに千代こは花の香のみなるかは

正八位勳八等  
數見保業

大皇子のなさけの露のかゝるらむ八千代も匂ふ庭の白菊

同し人

千代八ちよ榮ゆる御代のしるしこて其香も高き庭の白菊

丸山久右衛門

日の神のみめくみ受けて美しくさきそろひけり庭の玉菊

中原道義

八千草の色うつろひし我庭にひこりほゝ笑む白菊のはな

阿部章

翁草籬の竹をつるこしてみ世なかつきの庭にかをれる

同し人

水かれし夏につくしゝしるし見ゆて咲出にたる庭の白菊

赤木一二

しら菊に朝日子の影そはりつゝ眩ゆきまてに匂ふこの園

溝手重兵衛

日の御子のみそなはしけむ此園の菊は千年の後も榮ねむ

桑野正通

萬代の匂をこめて庭もせににしきよそほふき菊しらさく

木下松次郎

雲井まで花の香たかくにほふかな庭の白菊千代も榮ねて

秋久千代子

日のみこを迎へまつれる此園に高くも薰るしらさくの花

吉崎祐子

日の御子のめくみの露にうるほひて千年も匂へ庭の白菊

藤原淑子

さし昇る日の照添ひて庭の面に千代をこめても薰る白菊

正木せい子

雲るまで風にたくひて薰りけり庭もせにさく白きくの花

江見定子

此園に御子のならせは菊の香もいよゝ氣高く匂ひぬる哉

久保晴枝

畏しや朝日はのく照りはゆるこのさ庭への白きくの花

大岩常子



色に香にさては姿の氣高くも秋のちくさにまさる白きく

丸山 初子

白露と共にこぼれて薫るなり朝日ににはふ園のしらさく

水島 仲子

大みよのめくみの露をかさしにて千代の香高き庭の白菊

秋山 薫子

みしるしの菊のそのふの花のいろ匂ひも高き秋の中そら

山口 縣

九重のみけしをよそふ花なれや偏にはしき庭の八重菊

中村 珍政

こころある人はきて見よ色々の花ありこさく庭の袖かき

同 五十鈴

いつはあれこ今年計りは色も香もわきて匂へり庭の白菊

同 五十鈴

秋の霜けさみねそめてしら菊のはなさやかにも薫る庭哉

同 五十鈴

めくる日の光のさけき此庭に千代の香高し白きくのはな

栗林 幸子

雲かゝる讚岐のふしこ長へにめてたまはましこの庭の菊

香川縣

菊の香の漂ふ園にたゝすめは何時しか千世の年はへに鳧

堀澤 周安

此宿のかきねをしめていく千世の秋そちきれる庭の白菊

石井 朝太郎

此庭に松陰しめて咲匂ふ千代の菊の香しるくそありける

青井 常太郎

綾川のおやに尊きみめくみのつゆにうるほふにはの白菊

水原 義正

めてまし、ほまれそ高き飯の山雲井にあふくにはの白菊

山田 澄次

雲あよりたつも舞ひこし園の菊匂ひたかくも咲にける哉

請川 新次郎

又さなき日嗣の御子のみそなはず庭の八重菊世々に薫らむ

同 人

宮武 秀三郎

小川 甚十郎

正八位 勳八等





四  
種  
花  
能  
産

庭にさく黄菊白菊さりませせていつれ劣らぬ匂ひなるらん

從八位勳七等  
力丸安頼

色も香もつきせぬ園の白菊を千代の友とや君は見るらん

同 八人

風さへもかをるそのふの菊の花ちよろつ秋の色は見ゆつ

奈良角三郎

にほひくる風のまにく立よれば千代を友とす花園の菊

友安 胖太郎

香くはしく風こそ匂へ庭の面に今をさかりのしら菊の花

宮野 爲久

あまた咲く庭の白菊来て見れば八千代の秋の色そ匂へる

村尾 喜二郎  
七十九翁

此庭の籬に千代の秋しめてさかりひさしきしら菊のはな

堀家 嘉造

廣庭もせはきはかりに匂ひけり黄菊白菊咲きのさかりは

越智 儀造

すむ人の千代のかさしこにほふらん色香も清き庭の白菊

土屋 徳太

庭の面に千種の菊の咲いて、かせさへかをるこれの花園

赤澤 末吉

ひのみこの今日のいてまし言ほきて咲匂ひけり庭の白菊

瀧本 重秀

飯の山のほる朝日のさす庭に今さかりなり白菊のはな

鳥取 次郎八

庭の面に八重さく宿の菊の花榮ゆく代のためし也けり

片岡 恕平

香はかりは風に比ひて雲井にもにははむ庭のしら菊の花

齋藤 柳泉  
八十翁

皇太子のたせ給ひし庭の面にたふこく匂ふきくの初花

乾 金次郎  
七十九翁

時雨なる庭に咲きたる菊の花色こり、に秋を見せけり

小西 栖淨  
七十九翁

朝日子のてらせる庭のきくの花ちよのためしこ咲匂ひ亮

妹尾 廣一郎  
七十二翁

外國の人もまる来て仰くらむあさひ照り添ふ庭のしら菊

同 一人

御車の千代のなかねににほふまで庭の白菊さき靡きつ、

野溝 嗣奥  
七十二翁

行啓のめくみの露に色まして香風園にかをるしらさく

山本 文次郎  
七十二翁



皇太子のならせし庭の白菊のほまれや千代に彌匂ふらん

林 武彦 七十一翁

たくひなき譽そ匂ふ千代かけて風かくはしき庭のしら菊

桑原 正雄 六十一翁

皇太子のひかりにははて菊の花ほまれそ匂ふ風かをる庭

同 し 人

咲きにはふ庭の白菊けふこそは惠の露に色まさりけれ

津島 正巳

書よみてうめる心を庭の菊なくさめかほに花そにほへる

三好 良行

はるさめの頃よりみちし吾庭のきく的一本花さきいてぬ

大須賀 壽

はれわたるあきの日影に匂ふなり千代を根さし庭の白菊

多田 茂太郎

秋たけて園のかき根もあれにしをひこり色ます庭の白菊

矢野 藤次郎

庭もせに盛に咲ける菊の花色香世に似ぬこちこそすれ

森口 猪三郎

君か代のもとの秋をちきりにてにはのまかきに匂ふ菊哉

三木 忠 誼

世に匂ひすくれし庭の菊の花なほそ榮む千代に八千代に

辻 春 翠

みそなはす惠の露に時を得ていろ香まされる庭のもろ菊

土井 猪三郎

日のみこの御跡とめて菊の庭末のすゑまで薫りゆくらん

石井 數 市

限なき御代にあはむと咲にける菊の數々けふにほふらん

荒木 彦七郎

日のみ子の惠の露に匂ひけりきみか千ごせの庭の八重菊

乾 龍 晟

色も香も深き黄菊に契るかな幾秋さかふ千代のゆくすゑ

橘 繁三郎

この庭にのそませられし君か香を千代に傳へよ白菊の花

鳥取 規矩治

あさひさすかまたの庭に咲く菊の清き姿そ君しのはるゝ

鳥取 空 治

七重八重黄菊白菊さきみちて園生の風のかくはしき哉

古川 清六郎

長に庭のさかぬを薫れ菊さぬきの富士のうきなき世を

松浦 佳 雄



種々の庭の菊にもかきりなきあるしの千代の榮みわけり

七條 樫之助

玉しくもかしこき庭の面はわてちきりも深き千世の白菊

十川 俊六榮

雲井迄匂ひゆくらむ日のみ子かみそなはしつる庭の白菊

藤澤 行平

雲井まで風ふき行きてかをるらむにはの盛りの白菊の花

青井 武太郎

庭もせの露のめくみのうるほひてさきこそ誇れ白菊の花

草薙 助三吉

風かをる庭のまかきに萬代のあきをちきりてさける白菊

綾井 幹治

ほからかな朝日に匂ふ庭の菊いろさまく露そ光れる

秋山 荒次郎

庭もせに黄菊白きく一つ香にまうけの宮を迎ふけふかな

中山 宇太郎

白妙のあやのみけしに似たるかな千代を契れる庭の白菊

中尾 三束

大宮のみたまの露に花もさきうへなき色にほふ白菊

荒木 篤次郎

年毎に色香まさりて咲きにけり老せぬ宿の菊のはなその

岡坂 峰造

萬代の秋も薫れ庭の菊をひつきの宮はみそなはしけむ

鷹尾 新太郎

けふこいふけふを待けん庭の菊大みしるしを形にそ咲く

鳥取 宇平太

秋ふかき籬に霜のいろ見せて千代もごにほふしら菊の花

森 勝治郎

さりく色うるはしく咲きわけて千代を集る庭の群菊

平尾 龜太郎

飯の山よきる時雨の降る庭にあきの香たかき黄菊白きく

平岩 照治郎

つゆ霜にしをれぬ菊のいろ毎に匂ひも高く庭にさきみつ

近藤 忠三郎

きよめたる庭の白菊香を高め雲井にあふく星かこそ見る

清水 英實

君か園に咲きたる菊の千年をは我日の御子に捧けてし哉

山本 勇

日の御子を迎へまつりて君か代の千歳を祝ふ庭の白きく

日下 鶴三



日の御子を迎へまつりて此庭の菊の香をりもいや高き哉

菅 朝三

日の御子のいてまし待て白菊のけふを盛こ庭もせに咲く

植松 熊雄

もみちてる庭の垣根に千代こめて色香ゆかしく匂ふ白菊

中村 一也

あまつ日の光をうけて色も香もちよにさかぬ庭の白菊

笠井 兼三吉

玉の輿かゝれる庭に花さきて千代の香そする菊の一むら

森 米三郎

植置きし庭の白菊咲き出て、たかき薫りを聞くそ嬉しき

大石 平次

赤や白黄金の菊も庭そのに日の御子迎へ笑みさきにけむ

吉田 一正

家の風代々につたへむ玉敷のにはに時めく菊のかをりを

三好 長豪

春の日の光をうけて庭の菊ちよの秋もかをりますらむ

菅原 大哲

紫の雲たなひける君か庭幾千代かをるしらきくのはな

植松 竹四郎

おく露も玉こひかりてさしのほる朝日ににほふ庭の白菊

進 吉彦

侵かされぬ白さを曠に咲榮て隈なく通ふ菊のかうはせ

上杉 武七郎

菊の花さきの盛は白かねもこかねも庭にみちにみちけり

尾松 政次郎

朝な夕手入れし菊の甲斐有りて鶴駕を仰く今日そ樂しき

岡田 正一

しけりゆく文の林に香を添へて千代までにほふ庭の白菊

小川 駒藏

園のうち見事に咲きし花の香は幾千代ふこも色は變らす

中村 米藏

うゑそへて園の二もこ咲き匂ひうつる清水のかけを清けり

野末 直七

香風園に光を添へて千代までもにほひのこせる白菊の花

白川 米太郎

雲井まで匂ふ千こせの花さきてたふこかりけり庭の白菊

山本 博文

植なへし緑のまつも咲く菊もちよのいろ香を見する園哉

七 條

いつ子  
八十二姫



おほしつるあるしやいかに見る我も老を忘る、庭の白菊

竹内 嘉代子

常磐木の松の下なる菊の花しつくも千代の香に匂ひつゝ

兒島 瀑子

千代かけて色香時めく秋なれやにはもせにさく白菊の花

難波 春大恵

四の時いつれはあれご庭もせに黄金花さく秋のよろしき

大野 よしゑ

菊の花星のひかりささく秋は雲居にちかき庭ごこそ見れ

内田 恭子

常磐なる園生の松の下かけによはひあらそふ千代の白菊

上野 まさ子

菊のはな盛なるらむ千代の香のもるゝも床し庭の外まで

越智 津千代

みめくみの露にうるほふ白菊は君か庭にそ千代も匂はむ

大森 泰子

たくひなき千代のかをりは久方の空に匂へる庭のしら菊

正木 鹿子

かきりなく幾世も匂へ庭の面に心つくしてうるゑし白きく

藤澤 ちよ子

千よろつも榮ゆる庭に白銀やこかね花さく菊そめてたき

乾 富士子

日のみ子のたゝせし庭の名も高く匂出たり世にまさり草

宮武 秀子

おく露もいご重けなる庭の面にかをりあそへる白菊の花

林 静榮

いてましを仰きし秋の匂をは千代に傳へよ庭のむら菊

友近 壽美子

秋毎に君かつむへき庭の菊八千代をかけてかをり久しも

綾井 功子

庭の面にかをりゆかしき菊の花千代の色香に富める秋哉

綾井 最子

たくひなき光かさしてうるはしく御國の菊は咲匂ふらむ

新名 民子

香くはしく御庭すくれし菊の花齡ごもに榮ねますらむ

野口 貞子

さくのはないろさりにに咲いて、朝日に匂ふ庭の面哉

宮野 光枝

榮ねゆくしるしご共に年毎のみ庭の菊のいろそまされる

越智 千代子



昨日けふ庭に匂へる白菊はきくの中なるきくここそ見め

秋山 きぬ子

置霜にしをる、千草ぬきいて、千代の香そする庭の白菊

今里 くら

みめくみの露に一しほ色そひて菊の香をりも高きこの庭

平岩 弘子

いと深きめくみの露にうるほひて千代まで匂ふ庭の白菊

今上 菊子

老しらぬ露の香深し此園のきくのさま／＼色もさやかに

阿河 ふさ子

あふきにし日嗣の御子のみ光に庭のしら菊香は増りけり

日下 よし子

吹く風も香ににほふなりこの園のまかきの菊の花の盛は

七條 ご美よ

千世までもきぬ薫やのこすらむ霜にたゆまぬ庭の白菊

中村 富

こり／＼のきく咲初めぬ廣庭の木の下風も香に匂ふまで

北條 藤枝

千代しめて日嗣の御子のみ光にあねてもさくか庭の白菊

北原 岑子

千代かけてうるにし庭の八重菊は惠の露に今そ匂へる

乾 照野子

日の御子の御光そひて庭菊の香をりそ四方に幾世久しも

荒井 つや

四の時花のたねせぬこの庭のなかにも菊そ久しかるへき

佐々木 爲子

白菊の花にあしたのつゆおきてたまを見かける庭の面哉

平井 たみ

庭もせに黄菊白菊こきませて今をさかりの秋はきにけり

大須賀 道子

からやまごこつ國々の花よりも香も色もよしこの庭の菊

安藤 さこし

八重咲のかま田の庭のしら菊も去年のあきより九重の色

同 し 人

こきはなる綾の松山ほごちかき時雨の宿そ菊さかりなる

まつ子

愛媛縣

八千草の日々にかれゆく庭の面に霜をかさして匂ふ白菊

正七位勳七等 西原 義三郎



この庭に植ゑられし社芽出たけれ菊もはえある秋にあひてそ

正七位 富田政輝

朝なく霜おきそへて色ふかく匂ひこほるゝにはの白菊

正七位 宮崎丹彌

あまつ日の御子の光に照されて咲くもめてたき庭の白菊

加藤乗了

初霜もこゝろしておけ庭の面色香も千代と咲ける白きく

眞木松太郎

にはの外も風の香高し秋を深み黄菊白きく咲き盛るらむ

矢野稜威雄

皇御子の千代のむら菊みそなはず庭は雲井の心地社すれ

同 人

皇御子のいてましありと菊の花庭もせにこそ色きほひぬれ

榎戸鶯宿

さき出てゝさかり久しき菊のはなみる人たぬぬ四阿の庭

中川義也

ごり／＼に黄菊しら菊咲匂ふ庭に朝日のひかり映ゆたり

永井文平

七重八重さくやしら菊九重のみにはの露にさくやしら菊

田窪八束

いなしきの秋恵まれて彌増に咲薫る庭のきくめてたけれ

岡部隆吉

君か代の恵の露のかゝれはや庭の秋菊いろ香くはしき

田窪いごよ

御代いはふけふの佳日に咲初めて色香めてたき庭の白菊

越智君代

つゆは霜とおきかはれこも變らさる庭の白菊盛ひさしも

日野實子

九重の名残しのはむ翁くさ千代にかはらぬ風かをるその

岡部まき代

高知縣

美しきたかきほまれの溢れつゝ千代をこほく庭の白菊

浪越美代子

秋高く色香もふかく見あかぬはめくみの露をうくる庭菊

山本糸枝

福岡縣

日の御子の千代のためしと庵の名の時雨に褪ぬ庭の白菊

正七位 緒方稜威雄



千代かけて結ふ惠のうるほひにさきにほひける庭の白菊

從七位

大久保 千濤

まなひ屋の庭のしら菊霜をへて色も薰りもいや増りけり

正八位勳八等

寺嶋 静次郎

庭のものは惠の露にうるほひていろ香ふりせぬ黄きく白菊

同 人

年々に契をこめてさきぬらむかをりもたかし庭のしら菊

藤村 箴

はひかゝるつたの紅葉も色添ひて庭の岩根に白菊の咲く

尾形 静子

年ここにさきさかぬつゝ白菊のこゝにかしこに匂ふ庭哉

古井 はる

色も香も劣らさりけり處狭くさきうつみたる庭のむら菊

片山 貞子

熊本縣

皇子の御幸の跡に咲匂ふいこもはねあるそのゝしらさく

平野 梅四郎

千代かけて匂ふのみかはいてましの庭に榮ある白菊の花

吉永 秀教

宮崎縣

鳥もまひ魚も躍れる庭の面にゑみてや菊の千代も匂はん

正六位勳六等

永友 宗年

鹿兒島縣

いろかへぬ松に契りて廣庭の菊は幾千代にほひゆくらん

濱田 幸雄

沖繩縣

こつ國の花も匂へるこの庭にけたかく見ゆる黄菊しら菊

兼島 景福

北海道廳

ひをこしの鎧ほしたる庭さきにはふ黄菊や白きくの花

正六位

田村 正夫

芳はしき風ふく園は咲く菊の花の香よりや名に負にけむ

從六位

堀野 林治

九重の雲の上まで匂ふかなこゝろこめたる黄きく白きく

高畑 たね子



大直の雲のまはるはふんむのこころの霞も朝白鮮

くさくさに色は變れと園の菊いつれ劣らぬ香に匂ひつゝ

大君のめくみの露にうるほひてちよもさかぬ庭の白菊

年々に雲をこめてさかぬらむかたかし臺灣

朝なく庭におり立ち千代の數かそへても見る白菊の花

年々に雲をこめてさかぬらむかたかし臺灣

咲匂ふまかきの菊も色はぬ日嗣の御子を迎へまつりて

年々に雲をこめてさかぬらむかたかし臺灣

高きまの雲の朝白鮮の面もさかぬの平介と白菊

年々に雲をこめてさかぬらむかたかし臺灣

高久眼 千代

豊嶋 琉寶

高橋 種之  
七十五翁

臺灣

吉川 利一

支那

中西 安

眞只高

永武 宗四郎  
五六對六

年々に雲をこめてさかぬらむかたかし臺灣

鎌田共濟會役員

咲出てし園生の菊の花毎に千代をこめたる色香たよふ

同

朝日さす庭のむら菊よろこひの色さまくに彌薰るらむ

年々に雲をこめてさかぬらむかたかし臺灣

かきりなき恵みの露をかさしにて千歳にかをる庭の白菊

この庭の黄菊白きくたかき香を人の心にうつしてしかな

笑ましけに今日のよき日を迎へんと心して咲く庭の白菊

御恵みの光りにあえて咲きぬらむ露もかやく庭の白菊

日の御子のおまし處に薰りたる庭の白菊はぬはありけり

正七位勳五等  
津久井 金太郎

中尾 飛佐太

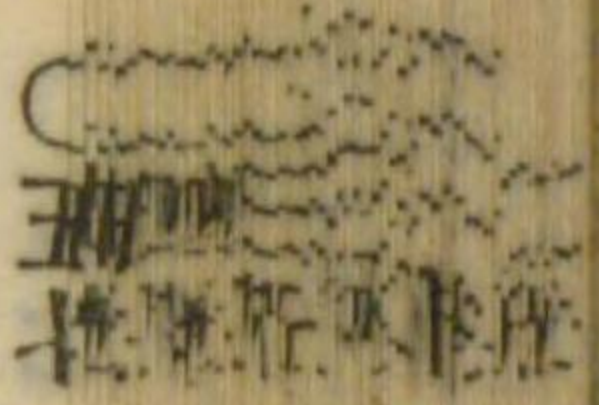
鎌田 さこ子

鎌田 晃

鎌田 頼子

鎌田 光江

鎌田 勝太郎





いてましを迎へかほにも匂ふかな薫りみちたる庭の白菊 鎌田 よしゑ

朝日さす庭のむら菊さりくにははある色に匂ふ今日哉 鎌田 憲夫

君か代の千年の秋にかをれかし御惠うけし庭のしらさく 鎌田 絢子

日のみ子の御光うけて我庭にくまなく匂ふ黄菊しらさく 鎌田 榮

今日まちて咲きたる庭の白菊を折りて捧げむ君の御前に 鎌田 豊子

昨日々す頭のみる藤まさの心の空をうけては御惠のさき 中 飛 佐 太

知出丁了園土の藤の芬香の干介さきとささの香さくもふ 新入共 金大瀬  
五子共 鎌田 憲夫

客年十一月二十日畏くも

東宮殿下わか圖書館に台臨ましく本館無上の光榮に浴したるは恐懼感激に堪へず會頭は此の光榮を永久に記念せんか爲歌會を催し廣く江湖諸賢の玉詠を懇請せしに續々高詠を惠み給ひ誠に感謝の至なり不肖此の歌集編纂の命を受けしか固より淺學菲才殊に此業につきては經驗なきことにて充分の注意を盡したれども誤寫脱漏誤植等の過なきを保し難く又印刷の都合上一首の字數を二十五字詰に一定せしたため自然玉詠の原字を更めたるもありわけて記載順序の禮を缺きし所もあらん尙此の集豫期の如く剗腕に附すへかりしを本館として餘儀なき事情ありてかく遅延せるなご其責すへて編者にあり乞ふ幸ひに御諒恕あらんことを謹みて白す

大正十二年八月

鎌田共濟會圖書館主任

中 尾 飛 佐 太



いてまゝを掲げかほにも句ふかき歌なりたるは、  
 中 風 兼 武 田 太  
 朝日さす庭のむら菊さきよまには、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 露の秋玉子のかげは、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 晴朝露のぬたを、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 じり給謝さる事謝ありて、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 和の露さ、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 さ二十正半詰、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 露じ、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 受り、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 さ懸、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 群へ、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 東宮、  
 田 兼 武 田 兼 夫  
 大正十一年八月二十日

大正十二年八月三十日印刷  
 大正十二年九月五日發行

(非賣品)

發行者

香川縣綾歌郡坂出町  
財團法人 鎌田共濟會圖書館

編輯者

香川縣綾歌郡坂出町  
中 尾 飛 佐 太

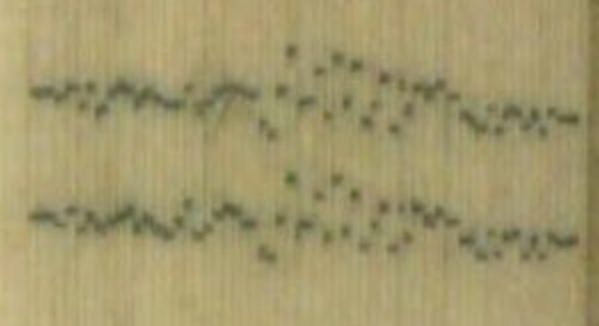
印刷者

香川縣高松市南鍛冶屋町十八番地  
田 村 市 太 郎

印刷所

香川縣高松市南鍛冶屋町十八番地  
大日本印刷株式會社





印 鳳 池 大日本印鳳社友會

香川縣高松市南區高松十八番

印 鳳 香 田 林 市 太 瓶

香川縣高松市南區高松十八番

印 鳳 香 中 乳 瓶 太

香川縣高松市南區高松十八番

印 鳳 香 大 衆 會 圖 書 館

香川縣高松市南區高松十八番

(非賣品)

大五十二平式月正 日發行

大五十二平八月三十日印



160  
169

160  
169

160  
169



